第１回 東名遺跡保存モニタリング委員会 資料

（１） 東名遺跡の現状と課題について　【資料１】P1～32

Ⅰ　史跡の概要　　P1～29

Ⅱ　史跡の現状と課題　P30～32

（２） 委員会の位置付けと方向性について　【資料２】P33

（３）平成 29 年度モニタリング調査結果について　【資料３】別添

Ⅰ　史跡の概要

１　東名遺跡の概要

（１）遺跡の始まりと終わり

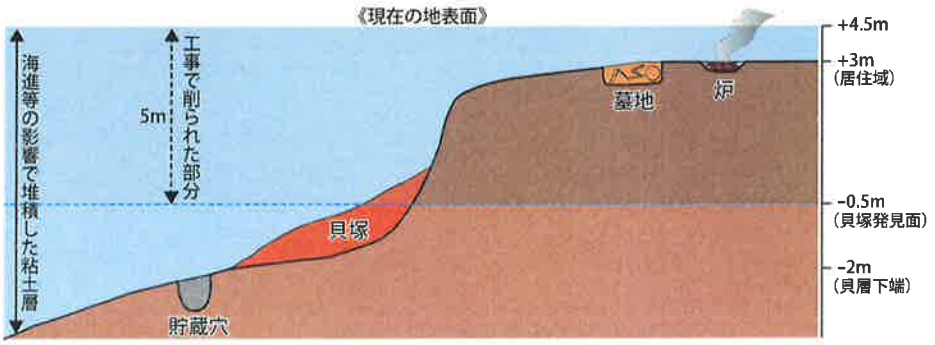
図Ⅰ-1　縄文海進ピーク時期の筑紫平野

氷河期が終わり、約 16,000 年前から全世界的な温暖化が徐々に進み、それとともに１万年以上続く縄文時代が始まった。その後しばらくは温暖化と寒冷化を繰り返す不安定な時期が続くが、約 8,200 年前の寒冷期（8.2K）を境に比較的安定した温暖期を迎える。そうした中、東名遺跡では 7,950 年前頃から貝塚が形成され始めるが、それは縄文人たちが海を利用した証であり、現在よりも海面が内陸に侵入していたことがわかる（図Ⅰ-1）。時を同じく九州の数ヵ所で貝塚形成が始まる。ところが約 7,400 年前以降、急速に海面が上昇し、丘の上にあった居住地までもが有明海に没してしまう。海水が浸入したところには浮泥が堆積し、彼らの生活の痕跡は粘土層中に埋没する。現在見られる遺跡周辺の平坦な地形（低平地）は、約 7,000 年前には完成していたものと考えられ、傾斜面に形成された貝塚の上部には、5m 以上の粘土層が堆積してしまうようである。このように東名の地が、縄文人たちが住むのに適していた時間は、わずか 600 年程の間であった。

その後、弥生時代に入るまで、佐賀平野には貝塚が形成されていないため、海面上昇により形成された広大な干潟は、縄文人たちにとって利用し難い環境であったようである。東名遺跡は佐賀平野唯一の縄文貝塚（現時点）であるが、広大な低平地の地下深くには、東名遺跡のような縄文時代早期の貝塚がまだ眠っている可能性がある。

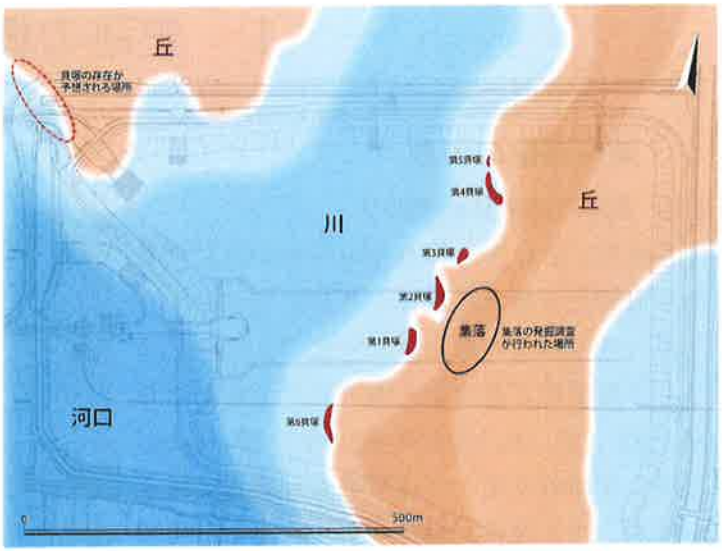
（２）奇跡の発見

低平地の洪水対策のため、巨勢川調整池の建設が始まったのは平成３年、同 15 年には掘削深度が 5m の地点まで達していた。その掘削工事中に偶然に貝塚が姿を現し、急遽調査を再開することとなった（図Ⅰ-2）。というのも、すでに平成５年から８年にかけて居住域（地表下１～２m）の発掘調査を行っていた（１次調査）が、その時点では、まさか 5m 下に貝塚が眠っ

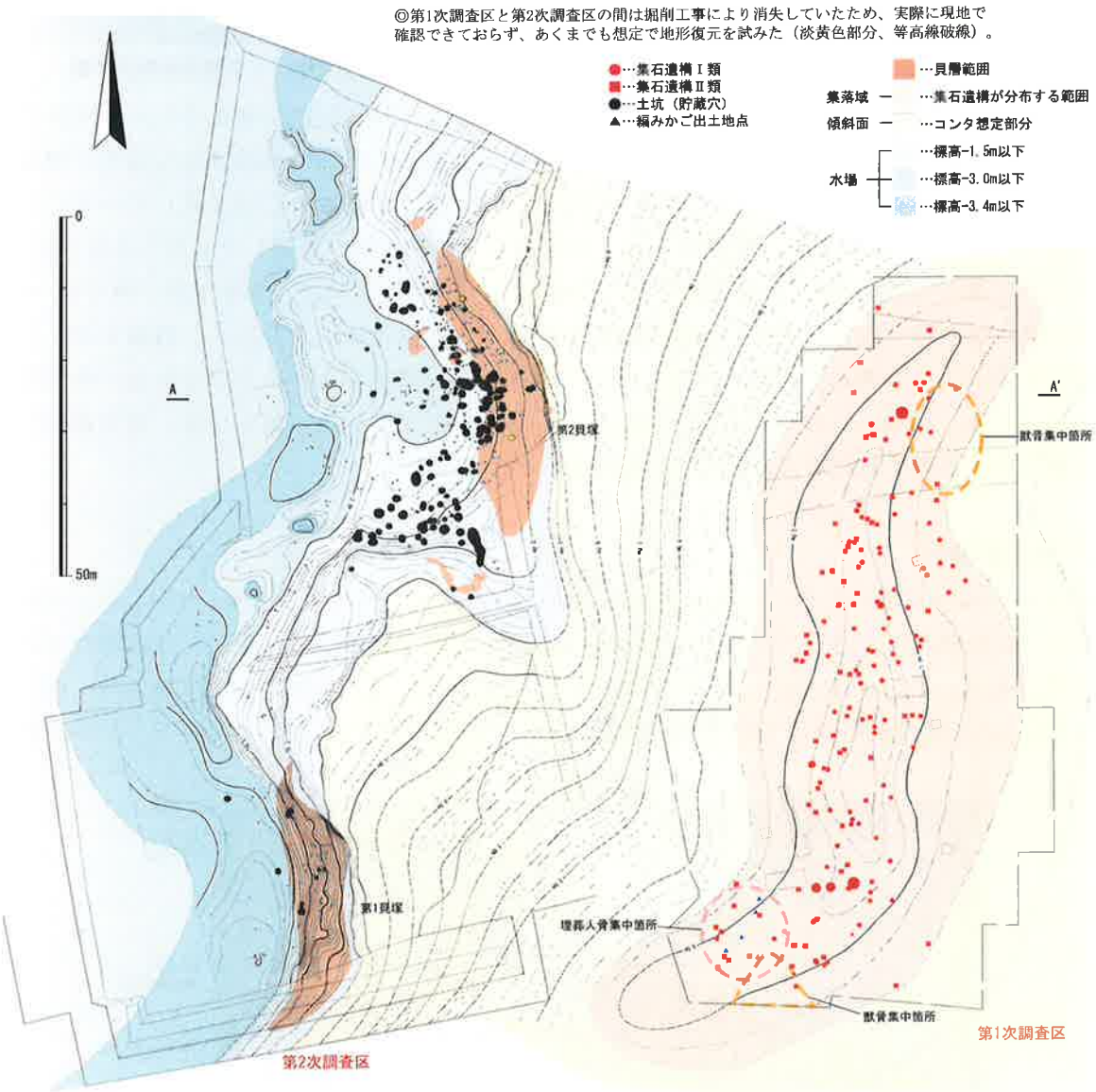


図Ⅰ-2　地形断面模式図

ているとは想像もできなかった。工事掘削面の精査により、調整池の中央を横断するように6ヵ所の貝塚が次々と発見され（図Ⅰ-3）、しかも厚い粘土層でパックされた貝塚には、動植物性遺物が良好に保存されていた。まさに奇跡の発見である。調査の結果、国内最古の湿地性貝塚であることが明らかとなり、発掘調査に着手していた第1・2貝塚は調査を継続（2次調査）、残りの第3～6貝塚については調査をせずに現地に保存することとなった。



図Ⅰ-3　東名遺跡の位置と地形復元

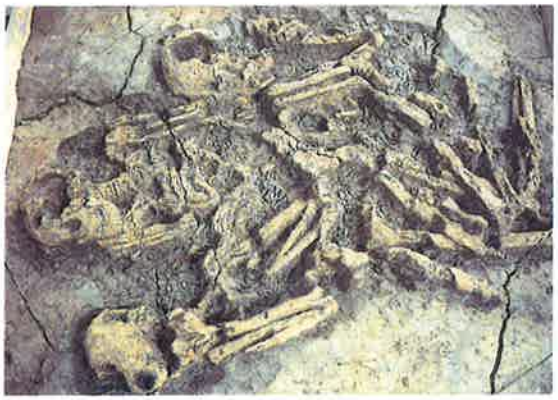


図Ⅰ-4　東名遺跡第1・2貝塚地形想定図（1/1,000）

（3）遺跡の特徴

東名縄文人たちは丘の上に住み、167ヵ所の炉跡（集石遺構，図Ⅰ-5）と墓地（図Ⅰ-6）、それと大量の土器や石器を残した。貝塚は6ヵ所確認され、そのうち発掘調査を行った第1・2貝塚には、貯蔵穴（ドングリを貯蔵する穴）が155基も残されていた（図Ⅰ-4）。貝塚は川縁の傾斜面に形成され、貯蔵穴も水が得られる川縁につくられた。このような湿地帯には、植物性の遺物が水漬かりの状態で良好に残された。また貝塚にはカルシウムを含んだ貝殻がたくさんあるため、獣骨など動物性のものが良好に残された。加えて海面上昇で厚く堆積した粘土層によるパッキング。東名遺跡では、この3つの条件が奇跡的に揃ったため、普通の遺跡では残らないようなものが良好に残存し、当時の生活様式や文化をより鮮明に、より具体的に知ることができる。しかも遺物の多くが国内最古級のもので、日本文化の起源を探る上でも重要な遺跡である。

図Ⅰ-5　集石遺構



図Ⅰ-6　埋葬人骨（3体同時）

（4）生　業

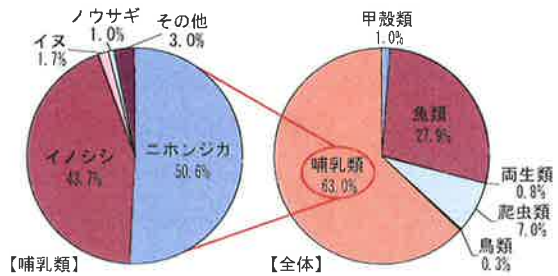
【貝類と貝層の形成】

貝塚に投棄された貝類はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキが主体で、中でもヤマトシジミの割合が高い。貝層は、微高地からの投棄行為により傾斜面に沿って堆積するが、低地側では、海面の上昇に伴う粘土層が間層となり、互層をなすように堆積している（図Ⅰ-7）。貝類組成は、第1～3貝塚では当初ハイガイ・アゲマキの割合が比較的高く、次第にヤマトシジミの割合が高くなる傾向にある。しかし、時期的に大きくズレない第4・5貝塚ではその傾向がみられず、位置関係なども加味すると、東名遺跡の貝塚群は少なくとも2つ以上の集団で形成された可能性がある。

図Ⅰ-7　第2貝塚貝層堆積状況

【動物遺存体と狩猟・漁撈】

貝塚から得られた動物遺存体は、哺乳類が最も多く、魚類が次いでいる（図Ⅰ-8）。哺乳類の中ではニホンジカ・イノシシが圧倒的に多く、重要な食料源であったことがわかる。またニホンジカ・イノシシに次いでイヌが多く出土しているが、



図Ⅰ-8　貝塚出土動物骨の割合

狩猟の伴侶として飼育されていたものと考えられる。魚類ではスズキが最多でボラ・クロダイが次ぐが、小型魚は少なく、さらに耳石の調査で体長 1m 以上のホンニベが数多く認められた。その上、漁網錘や釣針などの漁撈具が見られないことから、専ら刺突漁などによって大型魚を獲得していたようである。またスッポンも比較的多く、縄文早期から食用にされていたことがわかった。

【堅果類と貯蔵穴】

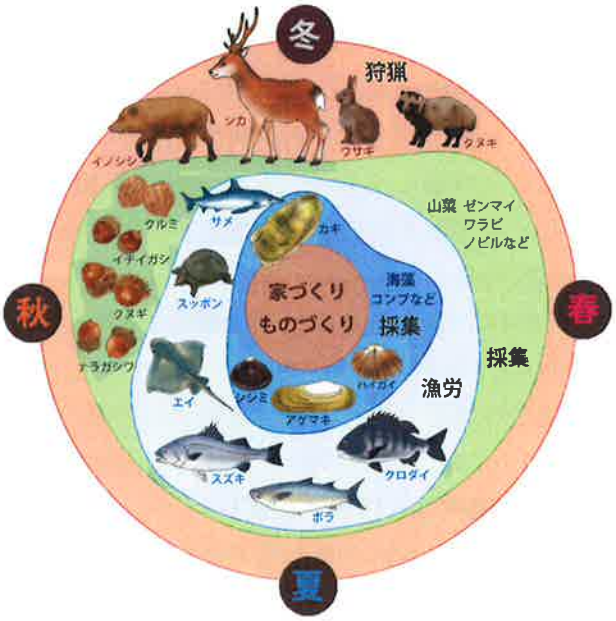
貯蔵穴は第 2 貝塚を中心に全体で 155 基確認した。当初は（淡水域）、湧水を利用した平面円形で直径 80 ～ 120cm、深さ 40 ～ 70cm 程度のもの（図Ⅰ-9）が多いが、海面が上昇し汽水域になると、潮汐作用の増水を利用した長軸が 2m を超える平面楕円形の大型貯蔵穴が出現する（図Ⅰ-10）。貯蔵された堅果類には、イチイガシ・クヌギ・ナラガシワがあり、高さ 70cm 以上の大型編みかごに入れられた状態で水漬けにされていた。また上記貯蔵穴の前者にはクヌギ・ナラガシワが、後者にはイチイガシが貯蔵される傾向にある。貯蔵穴内には、堅果類以外の素材束や木製容器類の未製品などが入れられており、水漬けの施設として多目的に利用されていたこともわかった。この他、打撃痕の残るオニグルミ核が貝層から比較的多く出土しており、オニグルミも重要な食料源の一つであったようだ。

【縄文カレンダー】

成長線分析などの結果をもとに、狩猟・漁撈・採集の季節ごとの変化で東名遺跡のカレンダーを作成した（図Ⅰ-11）。この結果から、1 年を通じた定住的な生活を送っていたことが考えられるが、時期的に未だ不安定な環境であったため、長期的な定住による大きな集落を形成するまでには至らなかった。それは、しっかりとした竪穴住居が確認されていないことからも推察される。

図Ⅰ-9　湧水利用の貯蔵穴

図Ⅰ-10　増水利用の貯蔵穴



図Ⅰ-11　東名縄文カレンダー

（5）ものづくり

ここでは、東名遺跡の特徴でもある動植物性遺物を中心に触れる。

【動物性遺物】

東名縄文人は貝殻で貝輪（ブレスレット）や貝玉など、たくさんのアクセサリーをつくった（図Ⅰ-12）。その素材となる貝は、ほとんどが深場もしくは遠隔地に生息する貝種で、死んで海岸に打ち上がった殻を使用していた。貝輪素材のうち、最も多いクマサルボウは有明海に生息するが、ベンケイガイ・マツバガイは外海に生息するため、唐津・糸島方面からもたらされた可能性が高い。特にオオツタノハは鹿児島以南の南西諸島から持ち込まれたものと考えられる。さらに貝玉の素材には、ツノガイ・小型巻貝・二枚貝（ビーズ）やタカラガイ・イモガイ・クチベニガイ（ペンダント）などがあるが、そのほとんどが外海に生息するものばかりである。これから縄文人たちの文化交流の範囲が想像以上に広く、特定な貝に対するこだわりも非常に強かったということがわかる。

図Ⅰ-12　貝製アクセサリー

また動物の骨や角は、刺突具をはじめとした利器やアクセサリーに加工した。中でもイノシシ牙のペンダントや魚椎骨のピアスやネックレス、鹿角のヘアピンなどのアクセサリーが多い（図Ⅰ-13）。特に列点文を施した鹿角のアクセサリーは、造形的に優れ、縄文人の高い技術と豊かな感性がうかがえる。遺跡から出土した貝製アクセサリーは800点以上、骨角製アクセサリーは200点を超え、早期段階としては群を抜いている。前期以降に開花する精神文化のいち早い萌芽を示す資料として重要である。

図Ⅰ-13　骨角製アクセサリー

【植物性遺物】

湿地を中心に多くの木器・編組製品等が出土した。中でも編組製品は740点を数え、そのほとんどが袋状の編みかごもしくはその断片であった。編みかごは高さが約60cm以上の大型と約50cm以下の小型に大別され、前者は主に堅果類の貯蔵用、後者は運搬具として使用されていたと考えられる。大型のかごは、ムクロジやイヌビワのヘギ材を網代やござ目で編み上げている（図Ⅰ-14）。小型のか

図Ⅰ-14　大型編みかごと復元品

ごは、ヘギ材の他にツヅラフジやテイカカヅラ属等のツル性植物を使用するものが多く、網代やもじりで編み上げる（図Ⅰ-15）。編組技法については、国内の縄文遺跡で確認された技法のほとんどが認められ、それらがすでに早期段階に存在していたことがわかった。

図Ⅰ-15　小型編みかごと復元品

繊維製品類としては、ツヅラフジやワラビを使用した様々な形態の縄類や把手等が出土している。その他、編組製品や繊維製品類の素材であるツヅラフジやワラビ等を束ねて水漬けにした素材束も、貯蔵穴を中心に出土している。

図Ⅰ-16　人面状木製品

木器には容器類をはじめ、掬い具・竪櫛・堀り棒・櫂状製品・弓状製品・板状製品・尖棒（木杭）等がある。容器類は未製品がほとんどで、その多くは貯蔵穴内に水漬けにされていた。整形が比較的容易な木の瘤を多用し、加工をしやすくするため水漬けや焦がしを入れながら、中を刳り抜いて、容器を製作したと考えられる。櫂状製品は扁平部の幅が狭く断面が三角形に近いものが多いため、干潟を突いて進むような機能を有していたのかも知れない。中には人面状木製品（図Ⅰ-16）のように、当時の精神文化を象徴するような資料も含まれる。

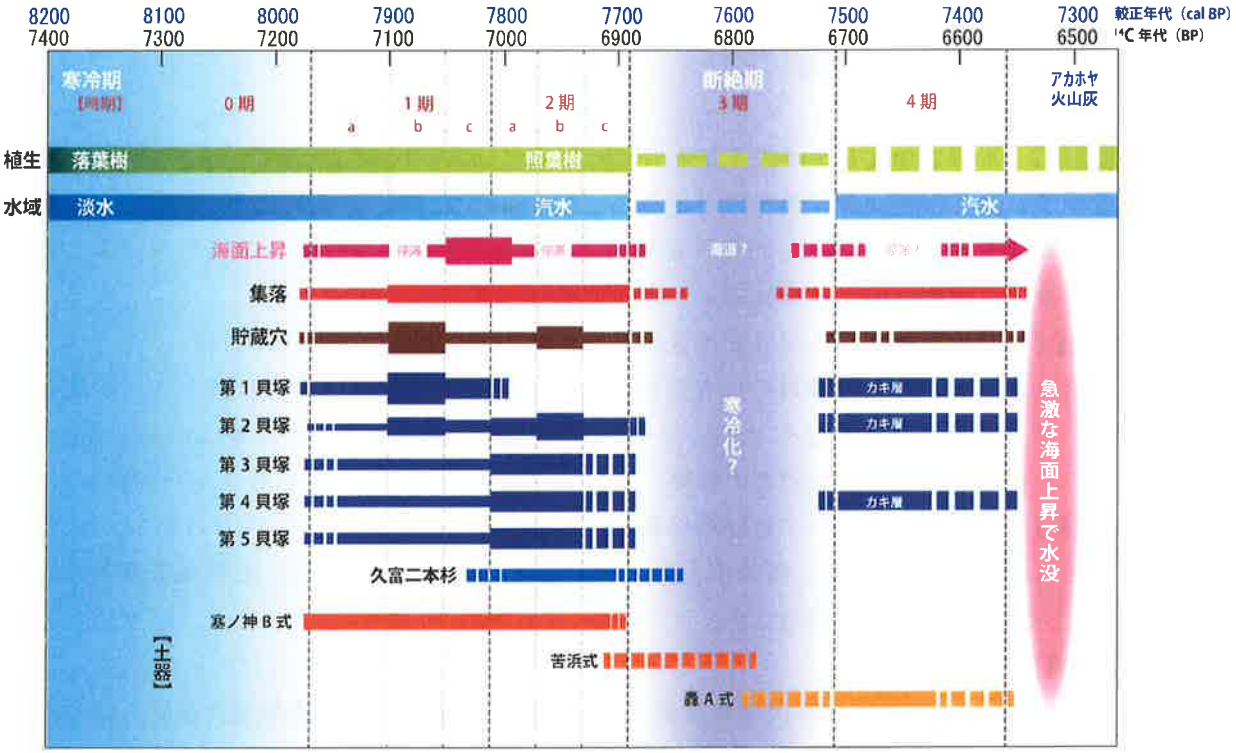
このように東名遺跡から出土した製品素材・未製品・製品は、未発達な技術力を補うため、素材の選択に加え、水漬けや焦がし等を多用し加工を容易にするといった工夫がみられる。これらは、初現的な植物素材利用と加工技術を知る上で貴重な資料である。

（6）遺跡の変遷

東名遺跡は、縄文時代早期後葉の約600年にわたって営まれた遺跡で、豊富な炭素年代測定のデータを基に細かな変遷が明らかとなってきた（図Ⅰ-17）。まず8.2K寒冷期から温暖化していく中で、7,950年前頃から遺跡の形成が始まる。植生の中心は落葉広葉樹林→照葉樹林へ、周辺水域は海面の上昇により淡水域→汽水域へと変化していった。貝塚の形成は約300年間（1・2期）続き、その後約200年間の断絶期（3期）を経て、再び大型カキを主体とした貝層が形成される（4期）。調査分析の結果、海面は上昇と停滞を繰り返しながら徐々に上昇していったことが推察され、停滞期には貝塚形成が盛んとなり、この地での人口増がうかがえる。

1a期はわずかな貝層で、少しずつ海産資源の利用が始まったことがうかがえる。1b期（海面停滞期）には一気に貝殻、魚骨の投棄が増加し、海産資源の積極的な利用をみることができる。まだしっかりとした漁具を持たなかった縄文人たちは、魚の習性を巧みに利用し、体長が1.5mもあるようなホンニベも獲得するまでになる。その後、1c期には海面が上昇、干潟の形成が進み、海産資源の利用がやや低調となる。第1貝塚はこの時期までで貝層の形成が途絶える。また低地部に設けられた貯蔵穴は、淡水域で湧水を利用した形で始まり、海面が上昇し粘土層の

※較正年代は目安で厳密なものではない。



図Ⅰ-17　東名遺跡変遷図

堆積が進むと、潮汐作用による増水を利用した溜桝（ためます）のような大型貯蔵穴を構築するようになる。貯蔵された堅果類も、湧水利用時はクヌギ・ナラガシワとイチイガシを入れた貯蔵穴が同程度みられるが、増水利用時はほぼイチイガシの割合が高くなり（短期間の水漬けで済む？）、植生変化も含めた環境に適応した植物利用の変化がうかがえる。

2a 期には海面上昇が再び停滞へと向かい、貝塚形成が盛んとなり、2b 期にピークを迎える。1b 期に比べると魚の利用がやや低調となるため、干潟の発達によって漁場の状況が一変してしまった可能性がある。一方でそれを補填するかのように、哺乳類（狩猟）の割合がやや高くなる傾向にある。貯蔵穴は小型化の傾向にあり、クヌギ・ナラガシワの貯蔵も比較的目立つようになる。

断絶期（3 期）には限定的な寒冷化（海退）が起こり、遊動的生活へ回帰したため、貝層の形成が途絶えた可能性がある。

4 期には再び貝層が形成される。今度はそれまでとは全く様相が違う、大型カキ（スミノエガキ）を主体とするもので、文化的な隔たりを感じさせる。期間的には少なくとも 130 年間以上は継続した可能性があるが、貝層の大変が洪水層で削平されており詳細不明である。

4 期以降、約 7,300 年前に起こった喜界（きかい）カルデラの噴火とアカホヤ火山灰の降灰までには、急激な海面上昇により遺跡全体が水没してしまう。土器型式については、断絶期（3 期）を境に塞ノ神（さえのかん）B 式→轟（とどろき）A 式への変化が認められる。

東名遺跡には、温暖化に伴う海面上昇という環境変動に翻弄（ほんろう）されながら、柔軟に環境に適応し、自然の恵みを巧み利用していた縄文人たちの痕跡が残されていた。本格的な貝塚を形成し、貯蔵穴や墓地をともなう先進的な生活様式を確立していた彼らは、温暖化による海面上昇が安定し、典型的縄文文化が開花する以前にその基盤をつくった。まさに時代の先駆者であったと言うことができよう。

2　発掘調査と研究成果

（1）発掘調査の概要と調査成果

①1次調査（図Ⅰ-27）

【確認調査】　平成2年4月～平成2年5月

国土交通省による巨勢川調整池建設予定地内（約55ha）に298本のトレンチを設定して調査を行った。調査の結果、もともと開発予定地内には周知の遺跡は存在しなかったが、東名遺跡を含めた2地点で遺跡の広がりを確認し、周知化を行った。

【本調査】　平成5年4月～平成8年8月＜途中数回の中断＞（図Ⅰ-18･19）

工事の計画上、確認された遺跡の保存は困難であったため、記録保存を目的とした本調査を実施した。東名遺跡は4,200㎡を対象に行ったが、低湿地であったため調査は困難を極め、3年間の月日を要した。後の2次調査の結果、本調査地が当時の居住域であることが判明した。

【整理調査】　平成6年5月～＜数回の中断を挟み継続中＞

出土遺物量は21万点を超え、整理作業には膨大な時間が必要であった。発掘調査報告書は平成15年度と20年度に分けて刊行した。

【調査成果】（図Ⅰ-20）

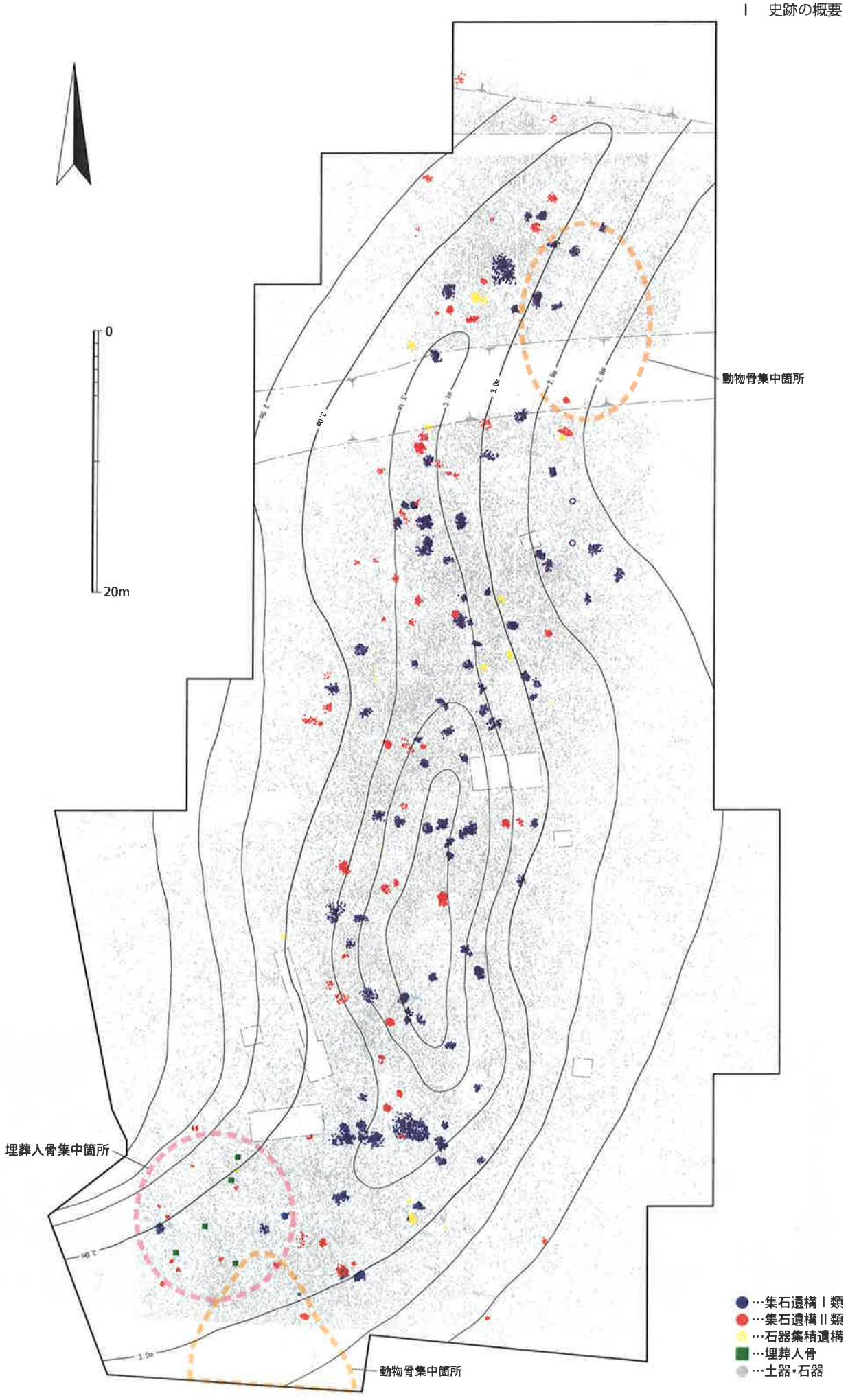
標高2.7～3.3m前後で縄文時代早期後葉の遺物包含層を検出した。遺物包含層からは土器約44,000点、石器約42,600点、人為的に持ち込まれた礫は約130,000点が出土した。総点数は21万点を超え、その膨大な出土遺物は定住生活を予感させるものであった。出土した土器のほとんどが塞ノ神B式土器で、少数ではあるが、押型文土器、轟A式土器（鎌石橋式含む）が出土した。特に轟A式土器の出土は、塞ノ神B式土器との型式学的な変遷を考える上で重要な資料となった。

遺構としては、集石遺構167基、石器集積遺構19基、8体分の埋葬人骨等を確認した。集石遺構は構成礫の大きさから2種に大別され、加熱により赤化した礫が数多く出土した。石器集積遺構はサヌカイト剥片の集積が最も多かった。埋葬人骨については、縄文時代早期という点で全国的にみても希少価値が高く、いずれも屈葬状態で検出された。さらに直径10m程の範囲に集中しており、墓地が形成されていた可能性が高い。

これらの調査成果は、縄文遺跡の少ない佐賀県内においては大変貴重な資料であり、北部九州の縄文文化のあり方を知る上で重要な位置を占めるものである。

図Ⅰ-18　居住域作業状況

図Ⅰ-19　居住域遺物出土状況



図Ⅰ-20　居住域遺構配置図（1/400）

②２次調査（図Ⅰ-27）

【確認調査】　平成15年7月～11月＜断続的に実施＞

1次調査終了後、巨勢川調整池の本格的な掘削工事が進む中、平成15年5月に標高-0.5m（現地表面から5m地下）付近で貝層の広がりが偶然に発見され、確認調査を実施した。調査の結果、4地点（第2～5貝塚）で縄文時代早期後葉の貝塚の存在が明らかとなった。開発側との協議の結果、工事計画上掘削を免れない箇所があることや、貝層が露出した現状での保存は困難と判断され、全ての貝塚について本調査を実施し、記録保存で対応することとなった。

【予備調査】　平成16年5月～9月

本調査を開始する前に、貝塚の規模及び調査方法・期間・費用を明確にするため、予備調査を実施した。この時点で貝層が露出していなかった第1貝塚と、調整池南半部から第6貝塚を新たに確認し、調査量が大幅に増加することが明らかとなった。本調査は、工事計画上、掘削を免れない第1・2貝塚から開始し、並行して保存を含めた調査方法の検討を進めることとなった。

【本調査】　平成16年9月～平成19年8月（図Ⅰ-21･22）

第1・2貝塚の6,000㎡を対象に調査を開始した。平成17年には編みかご等湿地部の植物性遺物の出土が予想を遙かに上回り、工事計画に合わせた第1～5貝塚の調査完了が困難であることが明らかとなる一方で、遺跡の重要性も増し、第3～6貝塚について何らかの対策を講じて現地に保存する方向性が打ち出された。第1・2貝塚の現地調査は3年の月日を要し、調査に際して、遺跡のもつ特殊性･重要性から有識者による「東名遺跡群調査指導委員会」を設置した。

【調査成果】（図Ⅰ-23）

標高-3～0m前後で縄文時代早期後葉の貝層を検出した。貝種はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキを主体とし、厚さ1～1.5m前後で地形に沿って堆積していた。貝層中には貝殻をはじめ、ニホンジカやイノシシ等を中心とした動物遺存体が多く含まれ、さらに貝輪・貝玉等の貝製品や猪牙製垂飾品・鹿角製装身具・刺突具・骨針等の骨角器も出土した。

その他、潮汐作用により堆積した水成粘土層を中心に堅果類の貯蔵穴（155基）が構築され、その中には数多くの編みかごが残されていた。さらに皿や鉢状の容器類、竪櫛、人面状木製品等の他、イチイガシ・クヌギ・オニグルミ等の堅果類も数多く出土した。この調査によって、1次調査箇所が微高地上の居住域で、2次調査箇所がそれに伴う谷部の水場・貝塚域であることが判明した。

図Ⅰ-21　第2貝塚貝層及び湿地部の作業状況

図Ⅰ-22　貯蔵穴掘削状況

図Ⅰ-23　第１・２貝塚遺構配置図（1/500）

（2）その他の関連調査（図Ⅰ-27）

久富二本杉（ひさどみにほんすぎ）遺跡は、巨勢川調整池建設に伴い偶然に発見された遺跡で、縄文時代早期後葉の貝塚の存在を東名遺跡の貝塚の発見前に知ることができた重要な事例である。指定史跡には含まれないが、東名遺跡の価値を整理する上でも必要な情報であるため、以下に記載する。

【確認調査】　平成14年10月～12月、平成15年4月～6月（図Ⅰ-24･25）

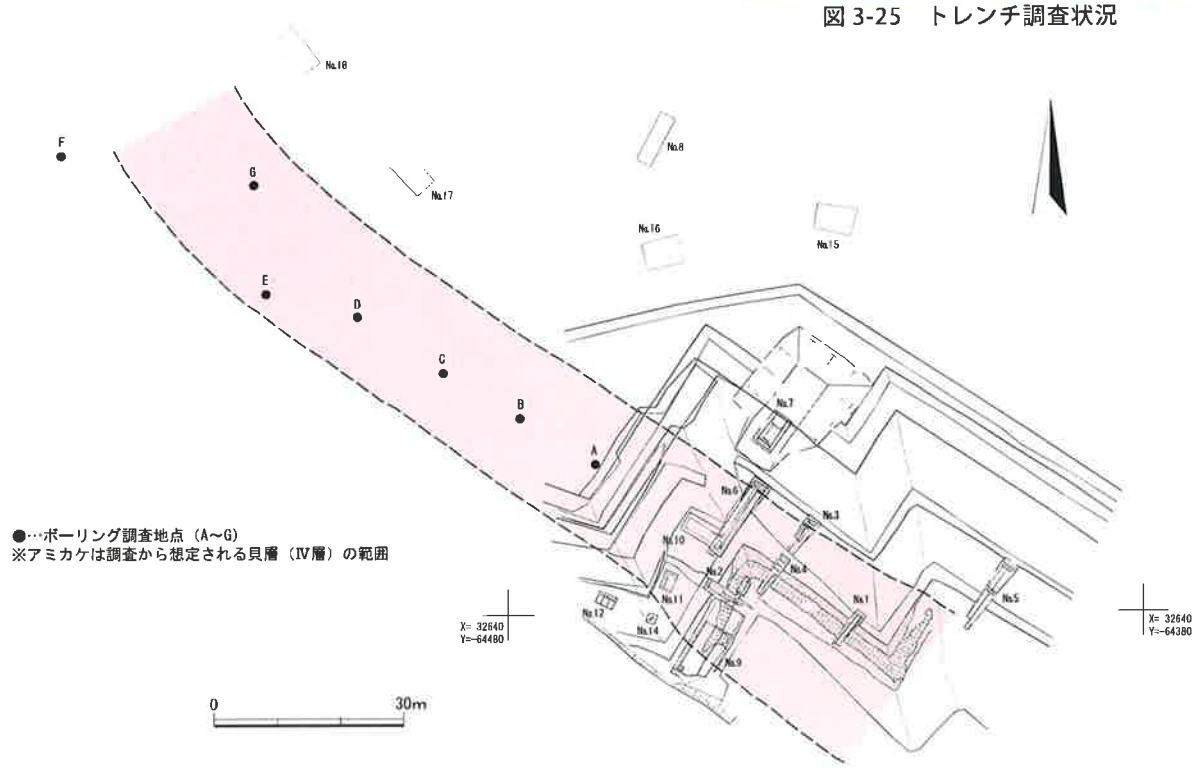
巨勢川調整池機場新設工事に伴う三面水路の掘削工事中に偶然発見された。発見当時は掘削法面に帯状に貝層が露出している状態で、それ以上掘削を行わない計画であったため、遺跡の概要を把握するトレンチ調査のみを行った。調査は、18本のトレンチを設定、7本のボーリング調査も行った。

【調査成果】（図Ⅰ-26）

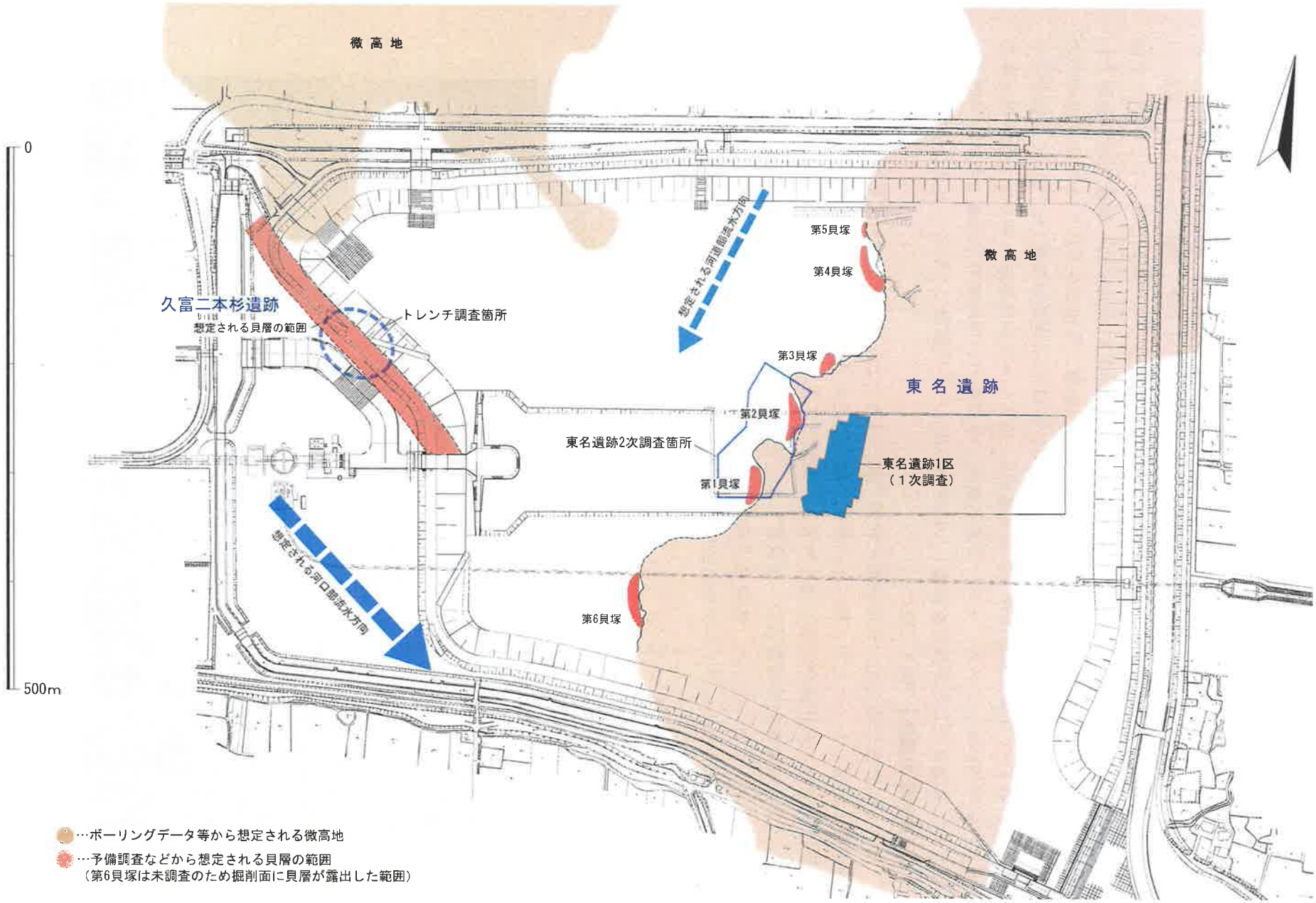
標高-4～-3m前後で縄文時代早期後葉の貝層を検出。貝種はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキを主体とし、厚さ30～40cm、幅20～25m前後で帯状に堆積していた。調査地は、地形復元から海岸線が最も内陸に入り込んだ河口付近であったことが予測され、さらに貝層の堆積状況等から貝塚本体ではなく、流水によって2次的に堆積した可能性が高いと判断した。貝塚本体は調査地より北西側に存在する可能性がある。貝層中には貝殻をはじめ、ニホンジカやイノシシ等を中心とした動物遺存体が含まれ、少量ではあるが土器・石器の他、貝製アクセサリーや鹿角製腰飾（こしかざり）等の骨角器が出土した。特に11本確認された木杭は打ち込まれた状態で検出され、この地が何らかの活動の場であったことが推察される。

図3-24　貝層露出状況（発見時）

図3-25　トレンチ調査状況



図Ⅰ-26　久富二本杉遺跡トレンチ設定図（1/1,200）



図Ⅰ-27　東名遺跡旧地形復元及び調査箇所（1/5,000）

（3）遺跡保存の経緯

【取扱い協議】

2次調査は当初、平成15年7月～11月に行った確認調査により確認された4つの貝塚について、「+3mまで常時貯水する可能性があったこと」「工事の計画上、掘削を免れない箇所があること（第1･2貝塚）」「貝層が露出した現状のままでの保存は困難と判断されること」等から、全ての貝塚について記録保存を目的とした本調査を実施することで開始した。ところが、平成16年に第1貝塚と第6貝塚が新たに確認されたこと、平成17年度には、調査実績が蓄積される中で調査量や工程がより具体的に予測可能となった結果、当初予定されていた18年度内での調査完了が不可能と判断された。そこで、平成17年11月に遺跡の取扱いについて協議を行った結果、第1・2貝塚は記録保存（本調査対応）、第3～6貝塚は遺跡の重要性も鑑み現地保存する方向で話がまとまった。ただ、貝層が露出した状態での現地保存は困難であると判断されたため、有識者による委員会を組織し、保存の方法について検討していくこととなった。

【保存対策の検討】（図Ⅰ-28）

第3～6貝塚に関して、貝塚を還元状態に保ってきた5m近い粘土層が失われている現状での保存は困難であったため、何らかの対策を講じる必要があった。そこで調整池の治水確保を前提に、遺跡の現状保存に最も適した方法を検討するため、文化財と対策工法双方の有識者による「東名遺跡保存検討委員会」を設置した。主に現状保存の基本方針とその方法について検討し、建議するものとした。委員会は全体で4回開催し、保存対策工法及びモニタリング方法を決定、その後はモニタリング委員会へ引き継がれた。

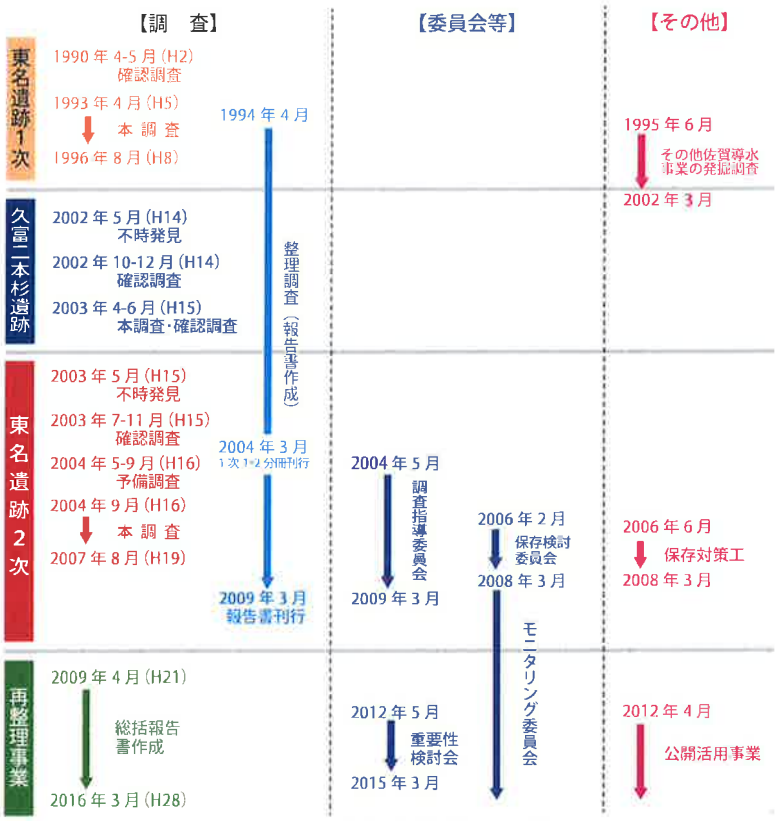
図Ⅰ-28　発掘調査が進む第1・2貝塚（手前）と保存対策工事が進む第3～5貝塚（奥側）

（4）これまでの調査経緯

ここでは、2次調査以降の整理調査の概要とこれまでの調査経緯（図Ⅰ-29）をまとめたい。

【整理調査】

国土交通省の委託事業として、現地調査と並行し、平成17年度から開始、平成20年度に発掘調査報告書を刊行（表Ⅰ-1）した。しかし出土資料が膨大であることや時間的制約から、報告書作成までに整理調査を完了することができなかった。そこで平成21年度から27年度まで文化庁国庫補助を受け、保存対象となった第3～6貝塚の調査成果及び未整理分の出土遺物や各種分析結果を可能な限り掲載した総括報告書の刊行を目的とし、整理調査を継続して行うこととなった。また、総括報告書作成に際し、遺跡の特徴や重要性を明らかにし、考古学的な評価を行うため、有識者による「東名遺跡重要性検討会」（表Ⅰ-2）を設置した。



図Ⅰ-29　東名遺跡群調査経緯

表Ⅰ-1　調査報告書一覧（佐賀市教育委員会刊行）

刊行年	書　名
2004 2009	佐賀市文化財調査報告書第150集 東名遺跡群Ⅰ【第1～4分冊】 （1次・居住域の調査）
2009	佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集 東名遺跡群Ⅱ【第1～7分冊】 （2次・貝塚域の調査）
2014	佐賀市埋蔵文化財調査報告書第85集 東名遺跡群Ⅲ （保存地区の調査）
2016	佐賀市埋蔵文化財調査報告書第100集 東名遺跡群Ⅳ【第1～4分冊】 （総括報告書）

表Ⅰ-2　東名遺跡関係委員会等

東名遺跡群調査指導委員会（H16.05～H21.03）

氏名	専門	所属等	職　務
甲元　眞之	考古学	熊本大学文学部	会　長
松井　章	動物考古学	奈良文化財研究所	副会長
金原　正明	環境考古学	奈良教育大学	
木下　尚子	考古学	熊本大学文学部	
黒住　耐二	貝類学	千葉県立中央博物館	
下山　正一	地質学	九州大学大学院	
中村　俊夫	年代学	名古屋大学	
山田　昌久	考古学	首都大学東京	

東名遺跡保存検討委員会→モニタリング委員会（H18.02～）

氏名	専門	所属等	職　務
三浦　哲彦	工法	佐賀大学名誉教授	委員長
甲元　眞之	考古学	熊本大学文学部	副委員長
澤田　正昭	保存科学	国士舘大学	
松井　章	動物考古学	奈良文化財研究所	
下山　正一	地質学	九州大学大学院	
岩尾　雄四郎	地質学	佐賀大学理学部	
嶋田　純	地下水	熊本大学理学部	
佐々木　靖人	地質・工法	土木研究所	

東名遺跡重要性検討会（H24.05～H27.03）

氏名	専門	所属等	職　務
甲元　眞之	考古学	熊本大学名誉教授	会　長
泉　拓良	考古学	京都大学	副会長
設楽　博己	考古学	東京大学大学院	
宮本　一夫	考古学	九州大学大学院	
小畑　弘己	考古学	熊本大学文学部	

（5）これまでの研究成果

東名遺跡は保存条件に恵まれ、8,000年前の遺跡でありながら様々な資料が残されていた。それは当時の古環境復元をはじめとした自然科学系の多様な分析を可能とし、多大な成果が得られている。これまでの分析によって、成果が得られている研究について表Ⅰ-3にまとめる。ただし、これらの中には調査研究が継続中のものも含まれる。また現在分析中で、まとまった成果が得られていない研究については掲載していない。

表Ⅰ-3-1　東名遺跡に関する研究一覧①

区分	報告書	テーマ	研究者・研究代表者	概　要
地質	Ⅱ-6	佐賀低平地の形成環境	下山正一（九州大学）	年代測定、貝化石分析、硫黄含有量分析、火山ガラス含有率調査を基に、遺跡の形成時期や水域環境を復元。それより佐賀平野北部の低平地形成の開始から完成時期を割り出し、佐賀平野の地形発達史を解析。東名遺跡が低平地形成の開始時期を知る鍵となる遺跡であることを証明。
	Ⅳ-4	佐賀平野の地形発達史		
	Ⅱ-6	堆積環境調査解析	市原季彦（復建調査設計）	粒度分析、堆積相解析により、堆積環境を復元。干潟→河川→干潟と変化し、海面上昇だけでなく、土石流などの影響も受けながら埋没していったことが判明。
環境	Ⅰ-4	縄文時代以降の古環境変遷	パリノ・サーヴェイ（株）	珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析等により、居住域の環境変遷の他、埋没後の環境も推測。
	Ⅱ-6	柱状サンプルにおける珪藻分析・花粉分析・種実同定	金原正明（奈良教育大学）	珪藻分析・花粉分析・種実同定により、当時の水域・植生環境を復元。基本的に、水域環境は淡水域→汽水域へ、植生環境は落葉樹→照葉樹へ変化していったことが判明。それらの環境変動が縄文人の生業活動に大きく影響していたことが分かった。また、貯蔵穴の内容物の変化についても明らかとなった。
	Ⅲ	第3-5貝塚の花粉分析・珪藻分析		
	Ⅳ-1	東名遺跡の環境分析		
	Ⅳ-4	東名遺跡の環境変遷・大型植物遺体・糞石について		
年代	Ⅱ-6	東名遺跡の堆積物及び出土遺物の年代	中村俊夫（名古屋大学）	貝層及び貯蔵穴出土の貝殻、堅果類、土器付着炭化物の炭素年代測定を行い、貝塚の堆積期間、貯蔵穴の形成年代、土器の年代、有明海湾奥の海洋リザーバー効果等を明らかにした。
	Ⅲ	第3-6貝塚より採取した資料の ^{14}C 年代		
	Ⅳ-1	東名遺跡出土遺物の ^{14}C 年代		
	Ⅳ-4	東名遺跡における放射性炭素年代測定		
	Ⅳ-1	東名遺跡出土人骨・動物骨の放射性炭素年代測定	米田　穣（東京大学総合研究博物館）	人骨、動物骨の年代測定により、縄文時代早期後葉の所産であること、居住域と貝塚域が共存していたことを証明。
人骨	Ⅰ-4	佐賀市東名遺跡の縄文早期人骨	松下孝幸（人類学研究機構）	居住域出土の埋葬人骨について、残存状態が悪いながらも埋葬姿勢、性別等を明らかにした。
	Ⅱ-6	人骨の形態学的特徴	奈良貴史（国際医療福祉大学）	貝塚出土の散乱人骨を中心に、平均身長や体格等、東名縄文人の特徴を明らかにした。国内でも資料が少なく不明確だった縄文早期人の新たな特徴も明らかとなった。
	Ⅳ-1	東名遺跡出土の縄文早期人骨の特徴とその意義	松下孝幸（人類学研究機構）	
	Ⅳ-4	東名遺跡出土人骨の特徴		
	Ⅱ-6	人骨の炭素・窒素同位体分析	米田　穣（東京大学総合研究博物館）	貝塚出土人骨の炭素・窒素同位体分析による食性復元。
	Ⅳ-4	炭素・窒素同位体分析と放射性炭素年代からみた東名遺跡における生業活動		人骨及び動物骨の炭素・窒素同位体分析を基に、当時の生業活動、食性、イヌ等の動物管理、他遺跡との比較による時代変化と個人差等を明らかにした。
	Ⅳ-1	歯牙のストロンチウム同位体比分析	米元史織（九州大学総合研究博物館）	人骨歯牙のストロンチウム同位体比分析により、個体間の数値のばらつきが少ないことが判明。集団や定住の問題を考察する重要な資料となった。
貝類	Ⅱ-6	柱状サンプルにおける貝類遺存体	黒住耐二（千葉県立中央博物館）	確認された貝類リスト。微小貝による貝塚周辺の古環境復元や食用貝類の選択性の高さ、近海以外から持ち込まれた貝類の存在や南島系貝類による製品の存在が明らかとなった。
		貝類		
	Ⅲ	第3-5貝塚の土壌から抽出された微小貝類遺体		
	Ⅳ-1	貝類遺体に関する追加報告		
	Ⅳ-4	東名遺跡の貝類遺体		
	Ⅱ-6	ハイガイ貝殻成長線分析に関する予察	樋泉岳二（早稲田大学）	貝殻成長性分析によるハイガイ採集の季節性が判明。採集は周年的に行われるが、春～夏に集中することを指摘。
	Ⅳ-1	ヤマトシジミ貝殻成長線分析に関する予察	畑山智史（埼玉大学）	貝殻成長性分析によるヤマトシジミ採集の季節性が判明。周年的な採集と貝塚単位による廃棄季節の違い等を指摘。
	Ⅳ-4	東名遺跡出土の貝製品	忍澤成視（市原市教育委員会）	貝製品の種類や縄文時代における位置づけ、南島系貝種の意義づけ等。

※報告書：佐賀市埋蔵文化財発掘調査報告書「東名遺跡群」Ⅰ～Ⅳ－分冊番号

表Ⅰ-3-2　東名遺跡に関する研究一覧②

区分	報告書	テーマ	研究者・研究代表者	概　要
動物骨	Ⅱ-6	柱状サンプルにおける動物遺存体	松井　章（奈良文化財研究所）	動物遺存体の同定に基づく、狩猟・漁撈活動の復元。
		動物遺存体		
	Ⅲ	第3-6貝塚出土の動物遺存体		
	Ⅳ-1	第1・2貝塚出土の動物遺存体	丸山真史（東海大学）	
		魚類耳石群分析	大江文雄（奈良文化財研究所）	魚類耳石の同定に基づく、漁撈活動の復元。
	Ⅳ-4	東名遺跡群の漁撈環境	松井　章（奈良文化財研究所）	魚骨の調査による水域環境の復元と主に耳石調査による漁撈活動の復元。耳石調査の可能性を示唆。
	Ⅱ-6	東名遺跡の狩猟活動	中川毅人（熊本大学）	シカ・イノシシの歯牙を使用した死亡季節及び年齢査定を実施。狩猟活動は周年的で、冬季にやや活発化することを指摘。
		骨角製品の制作と加工技術	丸山真史（東海大学） 永井理恵（京都大学）	主にシカ・イノシシ骨を使用した製品による部位の選択と加工技術。鹿角製列点文装身具の制作工程復元。
		動物遺存体の炭素・窒素同位体分析	石丸恵利子（広島大学総合博物館）	魚骨を中心に炭素・窒素同位体分析を実施。有明海沿岸部が主要な漁撈域であったこと等を指摘。
	Ⅳ-1	動物遺存体炭素・窒素安定同位体分析	覚張隆史（金沢大学）	イヌをはじめとした哺乳類を中心に炭素・窒素同位体分析を実施。イヌが食性の違いにより3集団に分類可能であること等を指摘。
		ミトコンドリアDNAからみた縄文犬の特徴	増田隆一（北海道大学）	犬骨を使用したミトコンドリアDNA分析を実施。日本在来犬が有している2つの遺伝情報が縄文時代早期から存在していたことを指摘。
	Ⅳ-4	東名遺跡出土の縄文早期犬骨	佐藤孝雄（慶應義塾大学）	犬骨の形態的特徴を分析、縄文犬の用途にも言及。
糞石	Ⅱ-6	糞石の記載と分析	金原正子（文化財科学研究センター）	糞石中に含まれる寄生虫卵の分析による排泄主の特定（ヒト・イヌ）や、魚骨で分からなかった魚種の特定（サクラマス）。
	Ⅳ-1	東名遺跡における糞石分析		
	Ⅳ-4	東名遺跡の環境変遷・大型植物遺体・糞石について	金原正明（奈良教育大学）	
植物	Ⅱ-6	出土木材・植物性遺物の同定	能城修一（森林総合研究所） 鈴木三男（東北大学植物園）	確認された木材リスト。製品による素材樹種の違いや、自然木から周辺植生にも言及。特に編組製品における樹種同定では際だった成果が得られており、編組製品研究における貴重な資料として注目される。
	Ⅳ-1	編組製品・繊維製品を中心とした植物利用		
	Ⅳ-4	木材利用からみる東名遺跡の重要性		
	Ⅱ-6	木製品付着黒色物質の科学分析	四柳嘉章（漆器文化財研究所）	木製品に付着した黒色物質の塗膜構造分析、赤外分光分析を実施。漆製品が存在しないことを指摘。
		種実同定・樹種同定分析	金原正明（奈良教育大学）	大型種実の同定による食用種実の推察や貯蔵穴による貯蔵種と非貯蔵種等を指摘。
	Ⅳ-1	東名遺跡の環境分析		
	Ⅳ-4	東名遺跡の環境変遷・大型植物遺体・糞石について		
	Ⅱ-6	出土堅果類の破砕痕および形状の検討	佐々木由香（パレオ・ラボ）	カヤ・オニグルミ・イチイガシについて人為的な破砕痕を確認。食用であることを指摘。
	Ⅳ-4	縄文時代の編みかごからみた東名遺跡		編組製品の特徴や素材と編組技法の関連性等を指摘。
	Ⅳ-4	編みかご復元実験	鈴木三男（東北大学植物園）	編みかごの素材調達と復元実験による製作工程等の解明。
石器	Ⅳ-4	礫石器の使用痕観察および土坑土壌の残存デンプン分析	上條信彦（弘前大学）	磨石類の使用痕観察を中心とした食料加工技術の解明。貯蔵穴土壌に残されたデンプン分析。
土器	Ⅱ-6	出土土器の材料分析	藤根　久（パレオ・ラボ）	土器の胎土分析を基に、材料の在地性が高いことや個体差による製作地・製作人の違いを指摘。
	Ⅳ-1	土器圧痕調査	小畑弘己（熊本大学）	野生のダイズ種子等、種実同定で分からなかった食用植物の存在を指摘。家屋害虫の存在を確認。
		土器付着炭化物分析	西田泰民（新潟県立歴史博物館）	土器付着炭化物の微化石分析、化学分析を基に、調理食材の推定を行った。
考古	Ⅳ-4	東アジアからみた東名遺跡	宮本一夫（九州大学）	東アジアの遺跡と比較しながら東名遺跡の位置づけを行った。
		日本列島における縄文早期末の様相と東名遺跡	泉　拓良（京都大学）	国内の縄文早期末前後の貝塚遺跡と比較しながら東名遺跡の位置づけを行った。
		東名遺跡からみえる縄文時代早期の精神文化	設楽博己（東京大学）	列点文装身具及び人面状木製品を取り上げ、縄文時代早期の精神文化について言及。
		東名遺跡における植物質食料の利用と貯蔵形態	小畑弘己（熊本大学）	種実同定と土器圧痕調査から判明した食用植物とその貯蔵形態に触れ、東名遺跡における植物利用戦略の特筆を指摘。
	Ⅱ-6	東名遺跡に見る人々の植物利用	山田昌久（首都大学東京）	出土木器を基に、土木技術の獲得や木材調達法、計画的な資源利用等を指摘。
保存	Ⅱ-6	東名遺跡の埋没環境と保存対策	応用地質株式会社	貝塚部の保存環境の分析と保存対策工の検討。
		東名遺跡における剥ぎ取り保存	株式会社スタジオ三十三	貝層の断面剥ぎ取り及び貝層・貯蔵穴の立体剥ぎ取りの方法及び工程の記録。

※報告書：佐賀市埋蔵文化財発掘調査報告書「東名遺跡群」Ⅰ～Ⅳ－分冊番号

（6）史跡地の調査概要

ここでは、現状保存（史跡指定地）された第3～6貝塚における確認調査・予備調査・保存対策工に伴う再調査の成果概要について記載する。

①第3貝塚（図Ⅰ-30~33）

確認調査及び予備調査において第3貝塚周辺に設定したトレンチは6本で、そのうち3本（No.1・3・9）のトレンチで貝層を確認した。貝層の規模は、長さ25m、幅12m、面積200㎡程度と想定され、厚みは最も残存状況の良い部分で約0.8mを測る。貝種はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキの4種が主体だが、特にヤマトシジミが優占し、地形の傾斜に沿って堆積している状況が観察された。またNo.1トレンチ内では貯蔵穴と考えられるSK3001土坑（どこう）を検出し、内部からナラガシワが多数出土した。第3貝塚はその位置関係から、第1、第2貝塚と有機的に関連していた可能性がある。

図Ⅰ-30　No.1トレンチ周辺（北東から）

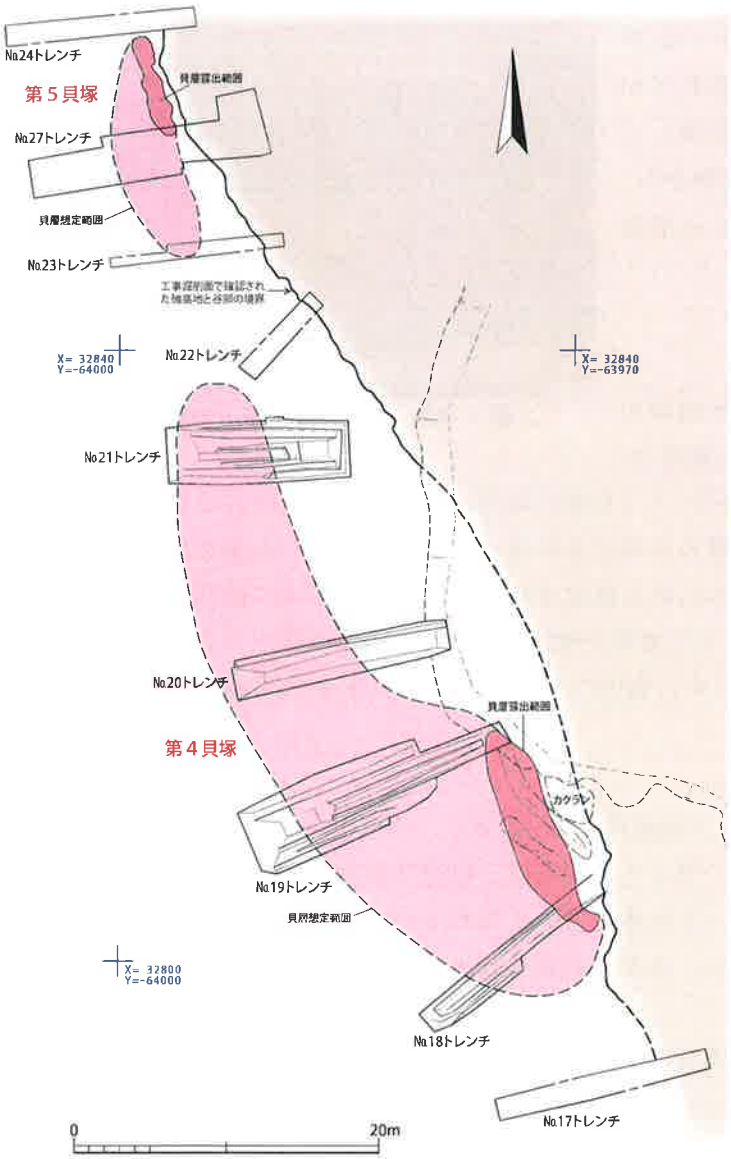
図Ⅰ-31　No.1トレンチ南壁（北東から）

図Ⅰ-32　No.1トレンチ北壁（南西から）

図3-33　第3貝塚トレンチ設定図（1/500）

②第４貝塚（図Ⅰ-34~38）

確認調査及び予備調査において第４貝塚周辺に設定したトレンチは６本で、そのうち４本（No. 18～21）のトレンチで貝層を確認した。貝層の規模は、長さ45m、幅12m、面積430㎡程度と想定され、厚みは最も残存状況の良い部分で約0.7mを測る。貝種はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキの４種が主体で、第１・２貝塚と比べると、アゲマキ・ハイガイの割合が高い。貝層は地形の傾斜に沿って堆積しているが、上部が砂礫層によって大きく浸食されていた。地形の傾斜が比較的緩く、第２貝塚のように貯蔵穴の存在が予想されたが、トレンチ内では確認できなかった。遺物は比較的多く、多数の土器片や貝製装身具等が出土している。



図Ⅰ-34　第４・５貝塚トレンチ設定図（1/500）

図Ⅰ-35　第４貝塚全景（真上から）

図Ⅰ-36　No. 19トレンチ南壁（北東から）

図Ⅰ-37　No. 18トレンチ北壁（南西から）

図Ⅰ-38　No. 27トレンチ南壁（北西から）

③第５貝塚（図Ⅰ-39~41）

確認調査及び予備調査において第５貝塚周辺に設定したトレンチは３本で、そのうち２本（No. 23・27）のトレンチで貝層を確認した。貝層の規模は、長さ15m、幅4m、面積40㎡程度と想定され、厚みは最も残存状況の良い部分で約1.5mを測る。急斜面に形成された貝塚で、面積は狭いが厚く堆積していた。貝種はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキの４種が主体で、第１・２貝塚と比べると、アゲマキ・ハイガイの割合が比較的高いのが特徴である。またNo. 27トレンチ内ではヤマグワの倒木が検出されており、傾斜面地にヤマグワなどの樹木が生育していたことが判る。位置関係、貝類組成等から、第４、第５貝塚は有機的に関連していた可能性がある。

図Ⅰ-39　第５貝塚発見時（南東から）

図Ⅰ-40　No. 27トレンチ（南東から）

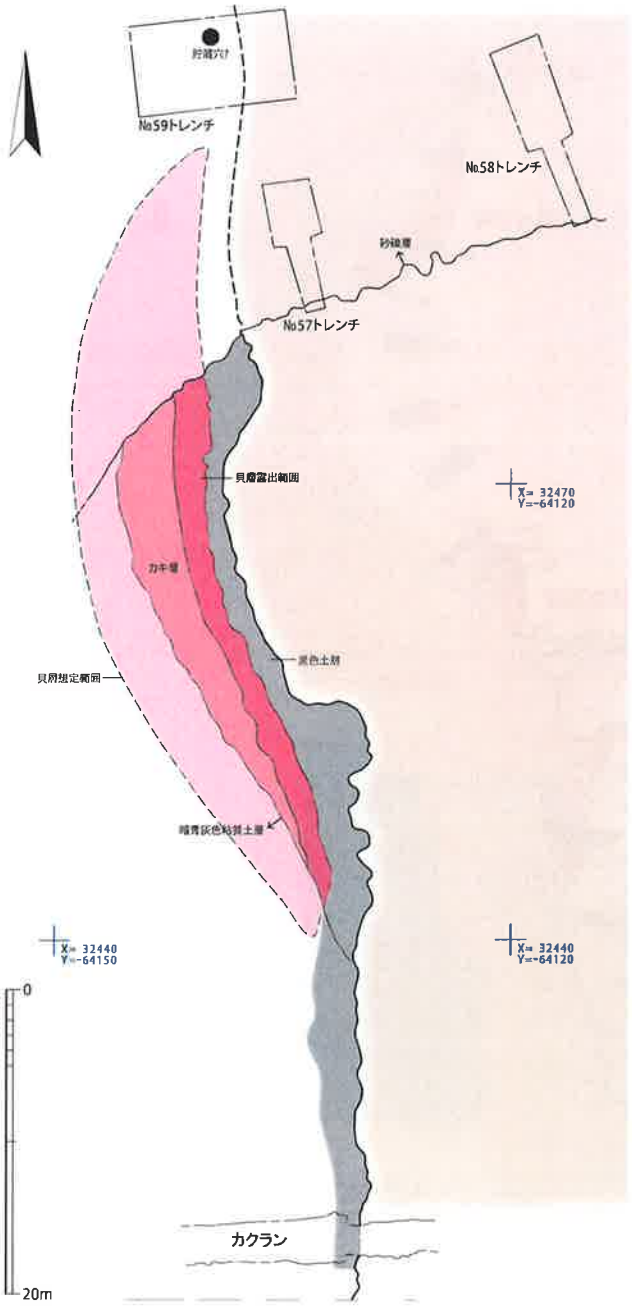
④第６貝塚（図Ⅰ-41~45）

保存対策工に伴う再調査において第６貝塚の貝層露出面の精査を行った結果、貝層の規模は、長さ52m以上、幅8m以上、面積400㎡以上（貝層の北部は砂礫層に侵食されるため推定）と想定された。東名遺跡の中では最大規模の貝塚である可能性があり、しかも第２貝塚等で確認された最上層の大形カキ層の残存状況も良好と推定された。また貝層の北に隣接して設定したNo. 59トレンチでは、貯蔵穴の可能性がある遺構を確認しており、第２貝塚と同じような貯蔵穴群の存在も予想される。なお、保存のため貝層中のトレンチ調査は行っていない。

⑤各貝塚の保存（図Ⅰ-46）

第３～６貝塚については、確認調査・予備調査・保存対策工に伴う再調査の成果を基にキャッピングの範囲が決定され、保存されるに至った。現在は、保存状態を監視するためのモニタリングを継続して行っている。また第３～５貝塚では、土層断面図の記録作業と各種分析用の貝サンプル、土壌サンプルの採取を行った。また各貝塚を代表する土層断面においては、記録保存の一環として剥ぎ取りを行った。

この他、第５貝塚の北側には第７貝塚の存在が予想され、東名遺跡はさらに北側に展開する可能性が出てきた。縄文時代早期後葉の短時期に複数の貝塚を残す集団が存在したことは事実であり、東名遺跡のさらなる分析・研究により、縄文時代早期後葉における日本列島内の動向を知る手がかりになることは間違いない。



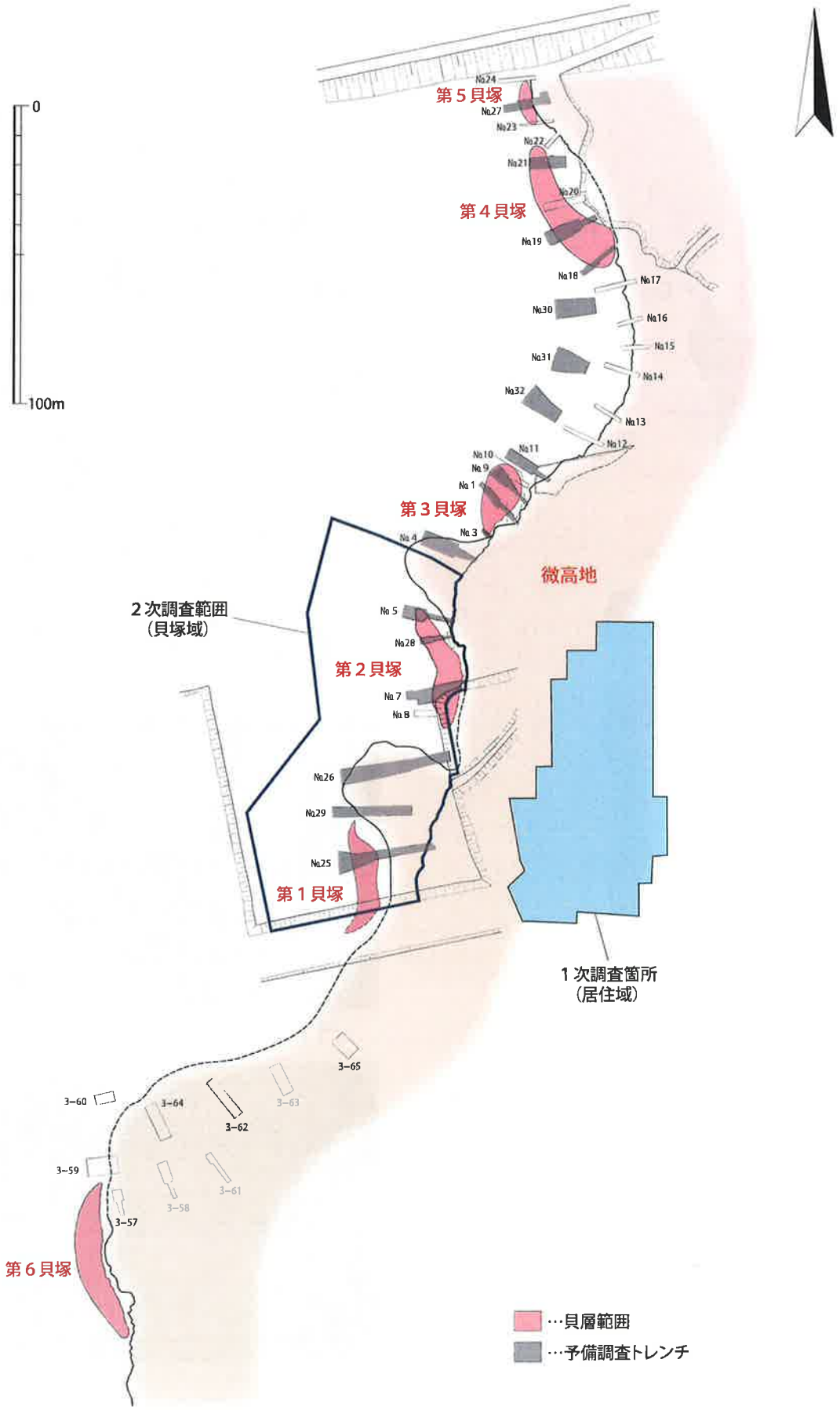
図Ⅰ-41　第 6 貝塚貝層露出・範囲想定図（1/500）

図Ⅰ-42　第 6 貝塚全景（真上から）

図Ⅰ-43　第 6 貝塚全景（北から）

図Ⅰ-44　第 6 貝塚貝層中央（南東から）

図Ⅰ-45　No. 59 トレンチ貯蔵穴（南から）



図Ⅰ-46　第１～６貝塚・予備調査トレンチ位置図（1/2,000）

3　史跡指定状況

（1）指定に至る経過

東名遺跡は、国土交通省による佐賀導水事業の一環として設置された巨勢川調整池の建設に伴い新たに発見された遺跡である。

平成2年に行った確認調査で縄文時代早期の居住域部分が確認され、「東名遺跡」と周知化した上で、遺跡の取扱いについて国土交通省九州地方整備局佐賀河川総合開発工事事務所（以下「佐賀河川」という）と協議を行った。その結果、調整池建設予定地内はほぼ全面が現況地盤より約5mの掘削計画であり、埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるため、本調査を実施し記録保存を図ることとなった。

1次調査は平成5年4月～8年8月にかけて実施した。調査の結果、塞ノ神式土器をはじめとした21万点を超える膨大な遺物が出土した他、集石遺構167基、8体分の埋葬人骨等が確認され、多大な成果を収めることができた。その後、調整池の本格的な掘削工事が開始された。

平成14年5月には、巨勢川調整池機場新設工事に伴い、現地盤から地下10m以上掘削された法面に、貝層が露出した状態で発見された。佐賀河川との協議の結果、「久富二本杉遺跡」として周知化した上で、平成14年10月～12月、平成15年4月～6月に遺跡の概要を把握するための確認調査を行った。調査地点の貝層は、流水の影響による2次堆積と判断され、貝塚本体は北西側に存在することが予測された。後の調査で、東名遺跡とは川を挟んだ対岸に位置していることが判明した。

平成15年5月には、掘削工事中であった調整池中央部で貝塚が偶然発見された。そこで平成15年7月～11月に確認調査を実施、4地点で貝塚の存在を確認したため、遺跡の取扱いについて佐賀河川と協議を行った。その結果、遺跡の現状保存は困難と判断され、全ての貝塚について本調査を実施し、記録保存で対応することとなった。ところが調査開始後、新たに2地点で貝塚が確認され、さらに編みかごをはじめとした国内最古級の有機質遺物の大量出土により、日本文化の起源を知る上で極めて重要な遺跡として一躍脚光を浴びた。そのため、工事計画に合わせた調査完了は不可能と判断し、佐賀河川と協議を重ねた結果、計画上掘削を免れない第1・2貝塚については記録保存、第3～6貝塚については遺跡の重要性に鑑み、保存対策を施した上で現状保存する方向で話がまとまった。記録保存調査は平成19年8月に終了、保存対策工は平成20年3月までに完了した。

保存については国内でも初めての事例であったため、有識者による保存検討委員会が組織され、1年間の検討の後、保存対策工（キャッピング）が施工された。その際、保存状態を監視するためのモニタリング調査を開始し、現在も継続して行っている。巨勢川調整池は平成21年度から運用が開始されたが、モニタリングによる数値は目標値に近づいた状態で安定し、平成27年で10年目を迎えることもあり、概ねキャッピングによる遺跡保存の見通しが立った。そこで、施設管理者である国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所佐賀庁舎と協議を重ね、史跡指定への同意が得られたことから、平成28年1月22日に史跡指定に関する意見具申書を文部科学大臣に提出した。なお、意見具申による史跡指定範囲は、キャッピング部分を包括する範囲とした。

その後、平成28年6月17日の国文化審議会から文部科学大臣への史跡指定答申を経て、平成28年10月3日付の官報告示で国の史跡に指定された。

（2）指定の状況

【名　　称】東名遺跡

【所 在 地】佐賀県佐賀市金立町大字千布字東名四本黒木290番ほか

【指定年月日】平成28年（2016）10月3日　（官報 号外第218号　文部科学省告示第140号）

【指 定 基 準】史跡の部

【面　　積】18,731.05㎡

【指 定 説 明】

東名遺跡は、現在は有明海の海岸線から15km離れた佐賀平野中央部のやや北側に位置するが、縄文海進が進行して最終段階に差しかかった約7000年前（較正年代約8000年前）の縄文時代早期末葉には、旧有明海に注ぐ旧河川の左岸で、標高3mの微高地から斜面を挟んで標高−3mの低湿地にかけて立地した集落跡である。

この遺跡は、平成2年度の巨勢川調整池の建設に伴う試掘・確認調査に際して、現地表面の5m下位から発見され、平成2年度から平成8年度までは、標高3mの居住域が発掘調査された。その後、平成15年度にさらに低い地点から貝塚が6ヵ所確認されたことから、平成16年度から19年度まで工事掘削が及ぶ貝塚2か所及びその周辺の貯蔵穴群が発掘調査された。

居住域は旧河川に沿うように南北100m、東西20mの細長い範囲に広がり、167基の集石遺構、2ヵ所の獣骨集中区、8体分の埋葬人骨が集中する墓域によって構成されるが、建物は確認されていない。埋葬人骨はいずれも屈葬であり、このうち3体については同時に埋葬された合葬と考えられる。出土遺物は、石器の種類としては石鏃・石匙・スクレイパー等があり、縄文土器としては縄文時代早期末葉に限定される塞ノ神式から轟A式までがある。

この居住域に近接する西側斜面には、ヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキ類等によって構成される2ヵ所の貝塚が、標高−0.5mから−2mの範囲に存在する。第1貝塚は南北32m、東西9m、第2貝塚は南北41m、東西10mの規模を有する。

貝塚から出土する遺物には、居住域と同様の石器や縄文土器以外に、アクセサリーや刺突具としての骨角製品、ブレスレットとしての貝製品がある他、主に食料残滓と考えられる動物遺存体としてはニホンジカやイノシシを中心にイヌ・カモシカ・カワウソ・タヌキ・クジラ・アシカといった哺乳類、スズキ・ボラ・クロダイといった魚類、スッポンといった爬虫類等も多数出土している。また、細かい刺突文で文様を作る鹿角製装身具は未製品も多く、鹿角素材から完成品に至るまでの製作工程が詳細に復元できる事例として注目される。

貝塚の西側でさらに低くなる標高−2mから−3mの範囲の低湿地では、155基の貯蔵穴が確認され、その内外から700点を超える編みかごをはじめ、竪櫛や皿状の木製品も出土した。貯蔵穴の形態は、直径1m、深さ70～40cmの円形で、イチイガシ・クヌギ・ナラガシワの実が出土することから、大多数はドングリの貯蔵用の土坑と考えられるが、中には製作途中の木製品が出土する事例もあり、それらについては貯木用の土坑の可能性もある。

編みかごはドングリを貯蔵するための専用の容器と考えられ、年代的には日本では最古級に属し、その個体数はこれまで全国で出土している縄文時代の編みかごの総数の約6割を占めるほど多い。形態は、体部下半部に最大径があり口径の2倍以上の高さを有する袋状の大型かご、高さが50cm以下で口径と高さがほぼ同程度のボウル状の小型かご、上からみた平面形が正方形もしくは長方形になる方形かごの3種類からなる。編み方も多彩でこれまで縄文時代において確認されている編み方がすべて存在し、編み方の工夫や素材を使い分けることで文様的効果

を意匠した事例もある。

東名遺跡は、縄文時代早期末葉の居住域・貝塚・貯蔵穴によって構成される集落構造が明らかな遺跡である。また生活様式や食料残滓（ざんし）の遺存状態も極めて良好であることから、生活全般においてその内容の復元を可能にする遺跡であり、当該期では九州や西日本はもちろん日本列島全体を見渡しても類例がほとんどない。特に、貝塚から出土する骨角製品や貯蔵穴群から出土する編みかごからは、当該期の造形的に優れた文様の実態を知ることができ、さらにこれらが国内では最古級に属することから、その製作技術を含め系譜についても注目されるところである。

このように東名遺跡は、日本列島の縄文時代早期末葉の生活復元に再考を促す可能性が高い遺跡として極めて重要であることから、史跡に指定し、保護を図ろうとするものである。

（文化庁文化財部監修『月刊文化財』2016年9月号より転載、一部改変）

【指定地域】表3-4に示した座標を順に結ぶ線によって囲まれる範囲（図Ⅰ-47･48）。

【土地所有】国土交通省（指定地は平成27年10月6日から佐賀市が占用）

【管理団体】佐賀市（平成29年3月6日指定）

【指定地現況】国土交通省の管理により運用されている巨勢川調整池内にある。

表Ⅰ-4　史跡指定範囲を示す座標

第3～5貝塚

点名	X	Y
ND-01	33245.463	-64255.233
NX01	33254.524	-64211.332
ND-14	33256.279	-64202.827
NX31	33255.622	-64202.999
ND-13	33246.894	-64205.281
ND-12	33238.943	-64203.304
NX02	33237.447	-64202.496
NX03	33206.084	-64185.550
ND-11	33197.120	-64180.707
NX04	33195.200	-64180.331
NX05	33166.120	-64174.637
NX06	33142.096	-64169.934
NX07	33141.498	-64169.817
NX08	33140.790	-64169.678
ND-10	33129.866	-64167.539
NX09	33126.720	-64169.285
ND-09	33120.115	-64172.950
NX10	33105.263	-64187.766
NX11	33086.442	-64206.542
NX12	33084.656	-64208.324
NX13	33077.450	-64215.513
NX14	33068.620	-64224.321
ND-08	33065.975	-64226.960

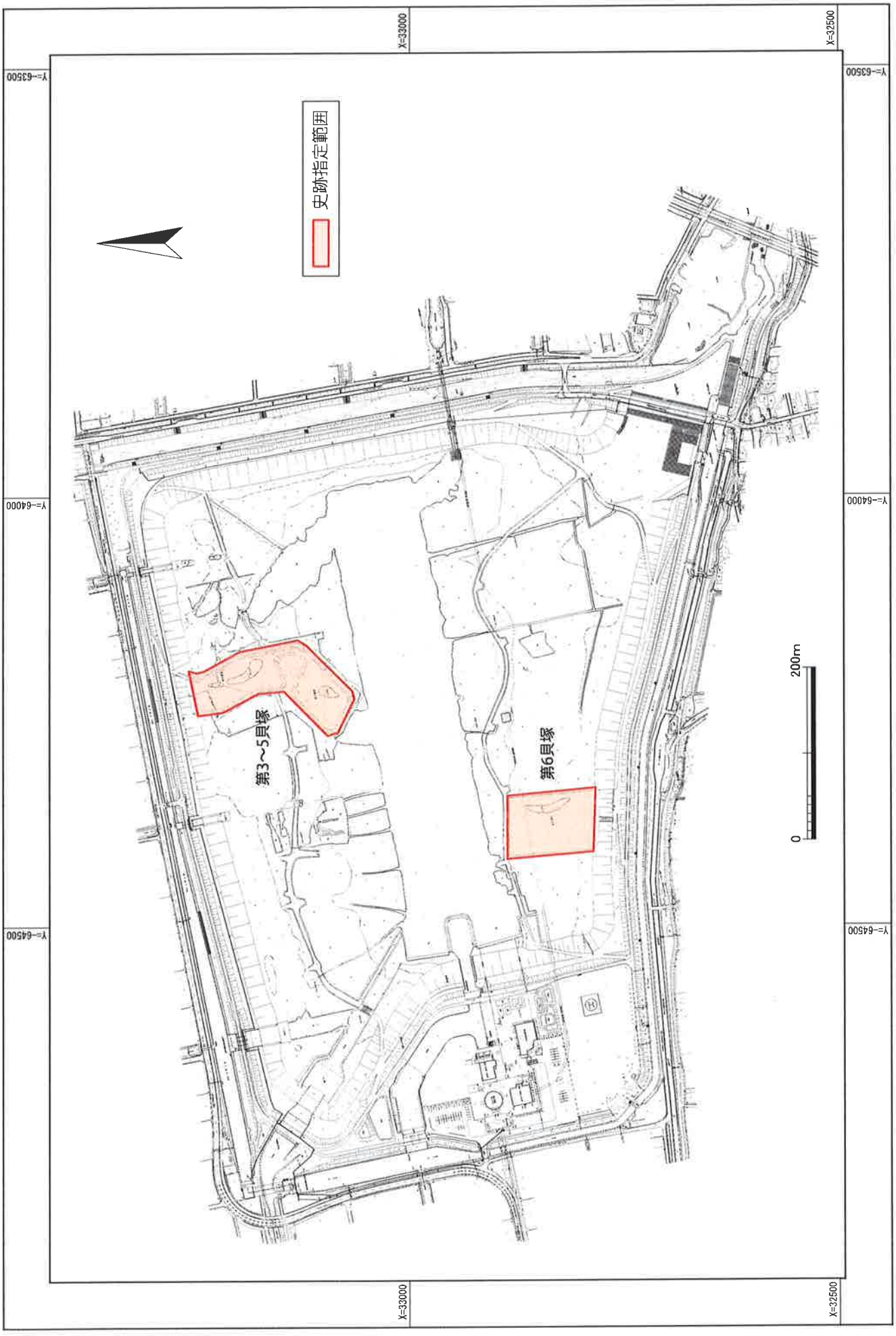
第3～5貝塚

点名	X	Y
ND-07	33063.680	-64236.006
NX15	33066.424	-64241.645
NX16	33066.791	-64242.400
NX17	33068.876	-64246.685
NX18	33071.222	-64251.506
NX19	33078.221	-64265.892
ND-06	33082.726	-64275.150
ND-05	33094.715	-64278.888
NX20	33103.732	-64269.756
NX21	33115.716	-64257.619
NX22	33118.261	-64255.041
NX23	33120.714	-64252.557
NX24	33121.469	-64251.793
NX25	33131.104	-64242.035
NX26	33131.731	-64241.400
ND-04	33145.748	-64227.204
NX27	33155.787	-64228.029
ND-03	33175.819	-64229.674
NX28	33186.836	-64235.556
NX29	33196.956	-64240.959
ND-02	33216.050	-64251.154
NX30	33229.198	-64252.977

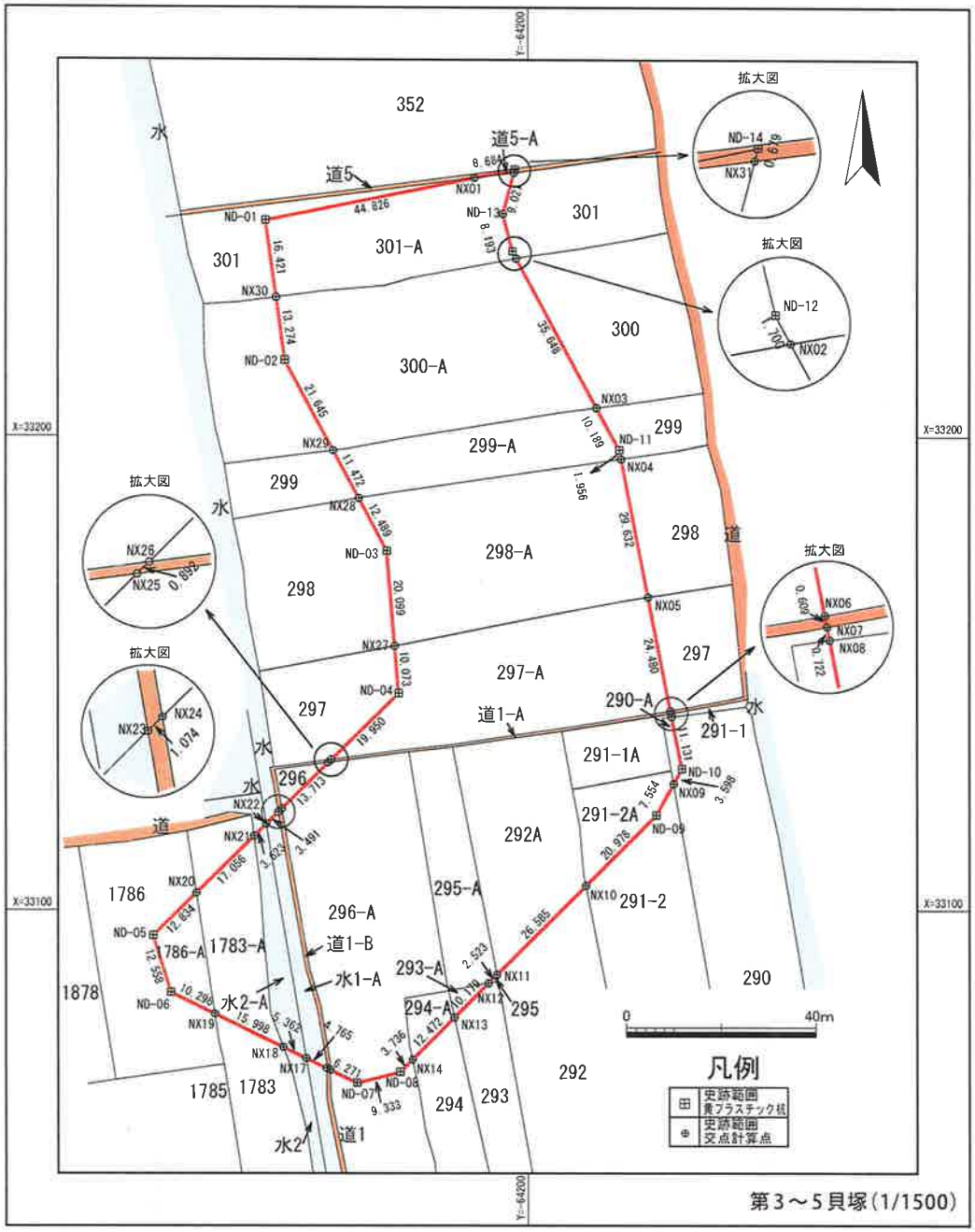
第6貝塚

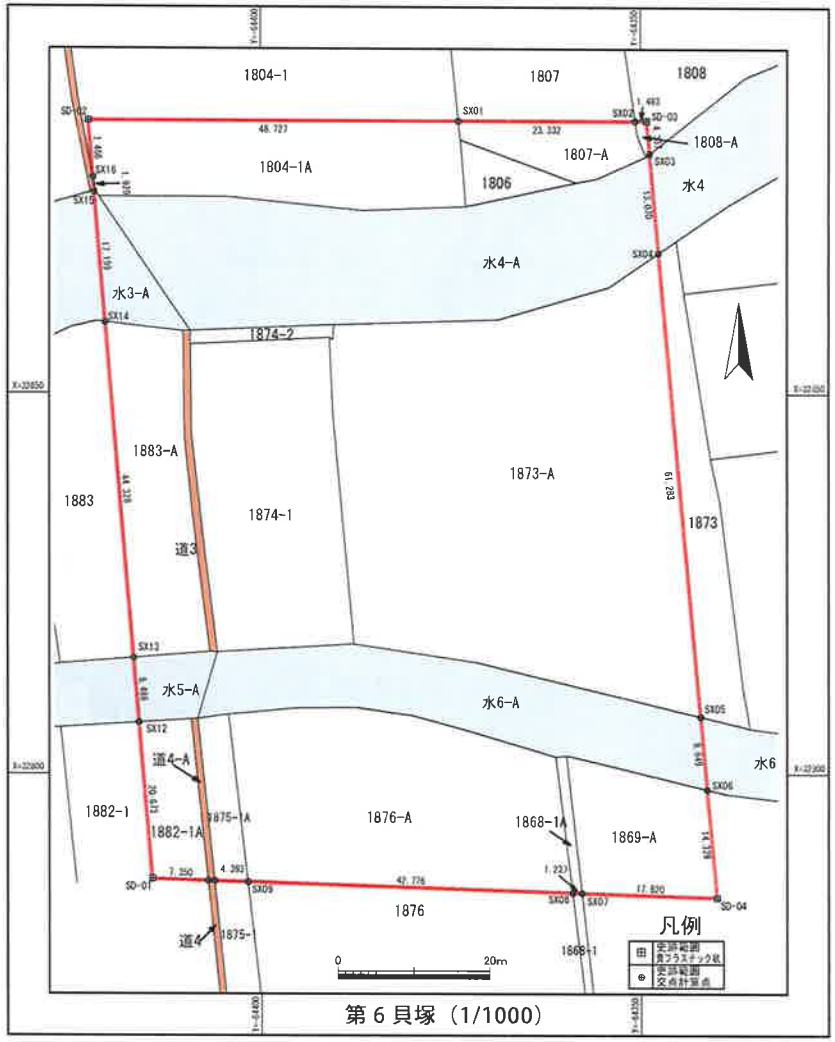
点名	X	Y
SD-01	32786.170	-64414.381
SX12	32806.769	-64416.131
SX13	32815.227	-64416.849
SX14	32859.396	-64420.601
SX15	32876.533	-64422.057
SX16	32878.455	-64422.220
SD-02	32885.894	-64422.852
SX01	32885.928	-64374.125
SX02	32885.945	-64350.793
SD-03	32885.946	-64349.300
SX03	32881.627	-64348.906
SX04	32868.611	-64347.720
SX05	32807.581	-64342.159
SX06	32797.972	-64341.283
SD-04	32783.702	-64339.983
SX07	32784.293	-64357.793
SX08	32784.334	-64359.029
SX09	32785.752	-64401.781
SX10	32785.898	-64406.172
SX11	32785.926	-64407.035

※国土調査法（昭和26年法律第180号）による第Ⅱ座標系を基準とする。

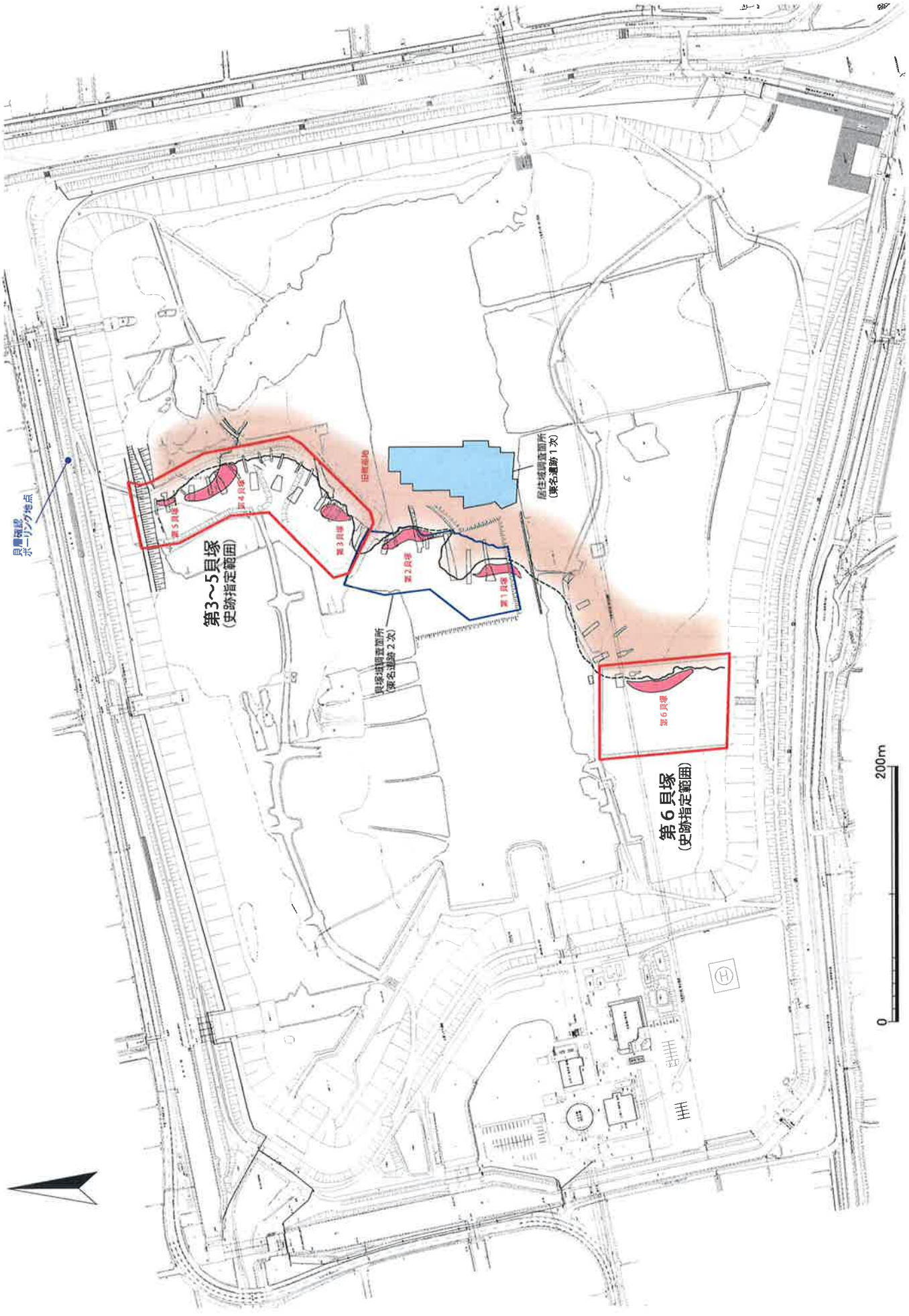


図Ⅰ-47　東名遺跡史跡指定範囲図①（1/6000）





図Ⅰ-48　東名遺跡史跡指定範囲図②（1/1500・1/1000）



図Ⅰ-49　東名遺跡史跡指定地と発掘調査箇所（1/4,000）

図Ⅰ-50　巨勢川調整池全景（平成 23 年撮影）

巨勢川調整池（東名遺跡）

【第18回】平成26年度(2014)

所在地: 金立町千布
所有者: 国土交通省
完成年: 平成21年

【作品講評】

『巨勢川調整池』は、巨勢川流域の洪水被害を軽減することを目的として、田園の広がる金立町千布に建設されました。約55haにおよぶ土堤に囲まれた調整池内には、今ではススキや葦などの植物が自生し、70種余りの野鳥も観察されるなど、動植物を含む広大な自然景観が生み出されています。また、揚排水施設として設けられた大規模な建築物等は、その大きさを考慮した配色、上層に向けて明度を変化させるなど、周辺に馴染むよう配慮されています。

更に、この建設工事にともなって、およそ八千年前（縄文時代早期）のものとされる『東名遺跡』が奇跡的に発見されました。縄文文化を知る上で重要な日本最古級の遺物が多数出土しており、貴重な貝塚の一部は現地地中に保存されて調整池と共存しています。

大規模な現代の人工構造物でありながら、太古の遺跡を内包し、さらには生物を育む広大な自然的景観を創出するすぐれた実例です。

図Ⅰ-51　佐賀市景観賞受賞（平成 26 年度）

II　史跡の現状と課題

1　保　存

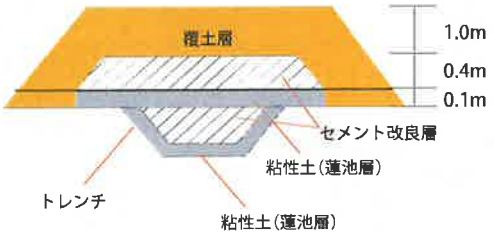
（1）保存管理の現状

【保存対策の経緯】

調整池の治水確保を前提に、遺跡の現状保存に最も適した方法を検討するために設置された「東名遺跡保存検討委員会」（第1回～第4回／平成18年3月～19年3月）において、第3～第6貝塚の保存対策の工法が決定され、保存対策工事が平成18年12月～20年3月まで実施された。その後も保存環境を監視するモニタリング調査は継続され、保存検討委員会は東名遺跡モニタリング委員会へと引き継がれた（表II-1）。現状では、当初予定した遺跡の保存対策効果は維持されているものと判断される。

【保存対策】

可能な限り掘削工事以前の環境にもどすため、貝層が露出している部分はもともとの覆土である蓮池粘土層で覆い、その上部にセンメント改良土によるキャッピングを行い、さらに改良土を保護するための覆土を施した（図II-1）。



図II-1　保存盛土模式図

【保存盛土の現状】

第3～第6貝塚の上部に施した保存盛土については、表面に芝を植え、年2回の除草管理を行っている。盛土のひび割れ等は定期的に目視点検を行い、これまでに大きな破損は認められていない。ただし調整池内の水位の増減（排水時の流水）により、盛土法面の一部に流失箇所（覆土層）が認められたため、捨石及びブロックマット敷設による補強工事を行った（図II-2）。

表II-1　東名遺跡保存検討・モニタリング委員会開催内容

内容	年度（平成）	委員会開催日	委員会名称	主な議事	事務局
保存対策検討	17	平成18年3月16日	第1回 東名遺跡保存検討委員会	東名遺跡の保存環境及び対策案について	国土交通省・佐賀市教育委員会
	18	平成18年5月30日	第2回 東名遺跡保存検討委員会	調査結果及び保存対策案について	
		平成18年9月26日	第3回 東名遺跡保存検討委員会	試験施工結果及び現地対策工状況について	
		平成19年3月1日	第4回 東名遺跡保存検討委員会	試験施工結果及び現地対策工状況について	
モニタリング	19	平成20年3月4日	第1回 東名遺跡モニタリング委員会	平成19年度　モニタリング結果の評価	国土交通省
	20	平成21年3月17日	第2回 東名遺跡モニタリング委員会	平成20年度　モニタリング結果の評価	
	21	平成22年3月3日	第3回 東名遺跡モニタリング委員会	平成21年度　モニタリング結果の評価	
	22	－	資料送付のみ	平成22年度　モニタリング結果の評価	
	23	－	資料送付のみ	平成23年度　モニタリング結果の評価	
	24	平成25年3月4日	第4回 東名遺跡モニタリング委員会	平成24年度　モニタリング結果の評価	
	25	－	資料送付のみ	平成25年度　モニタリング結果の評価	
	26	－	資料送付のみ	平成26年度　モニタリング結果の評価	
	27	－	資料送付のみ	平成27年度　モニタリング結果の評価	
	28	平成29年2月16日	第5回 東名遺跡モニタリング委員会	平成28年度　モニタリング結果の評価、過去の調査総括	
	29	平成30年2月9日	第1回 東名遺跡保存モニタリング委員会	委員会の位置付けと方向性 平成29年度　モニタリング結果の評価	佐賀市教育委員会

第４貝塚補強工事箇所平面

第６貝塚補強工事箇所平面

①第４貝塚補強部分全景
②吸い出し防止シート施行（第４貝塚）
③捨石施行状況（第４貝塚）
④捨石施工後（第４貝塚）
⑤第６貝塚盛土全景（補強工事後）
⑥流失状況（第６貝塚）
⑦ブロックマット施行状況（第６貝塚）
⑧ブロックマット施工後（第６貝塚）

図Ⅱ-2　保存盛土補修工事状況（平成 27 年度）

（2）保存管理の課題

【モニタリング調査】

現状で遺跡の保存環境を確認する方法はモニタリング調査しかない。そのため今後も継続的に行っていく必要があるが、表Ⅱ-2に示したとおり、土壌環境を観測する計器が経年劣化により故障してきており、計器を更新する方法を検討する必要がある。現状では、これまでのモニタリング調査により土壌水分の計測で遺跡の保存状態が推定できることがわかっており、幸い土壌水分計器の故障は見られないため、土壌水分の計測で保存環境を監視している状態である。この土壌水分計器もいつ故障してもおかしくない状況にある。また、キャッピング盛土の耐用年数は50～100年と想定されており、機能低下を確認するためにもモニタリング調査を継続していく必要がある。今後とも、東名遺跡保存モニタリング委員会等において継続的に検討していきたい。

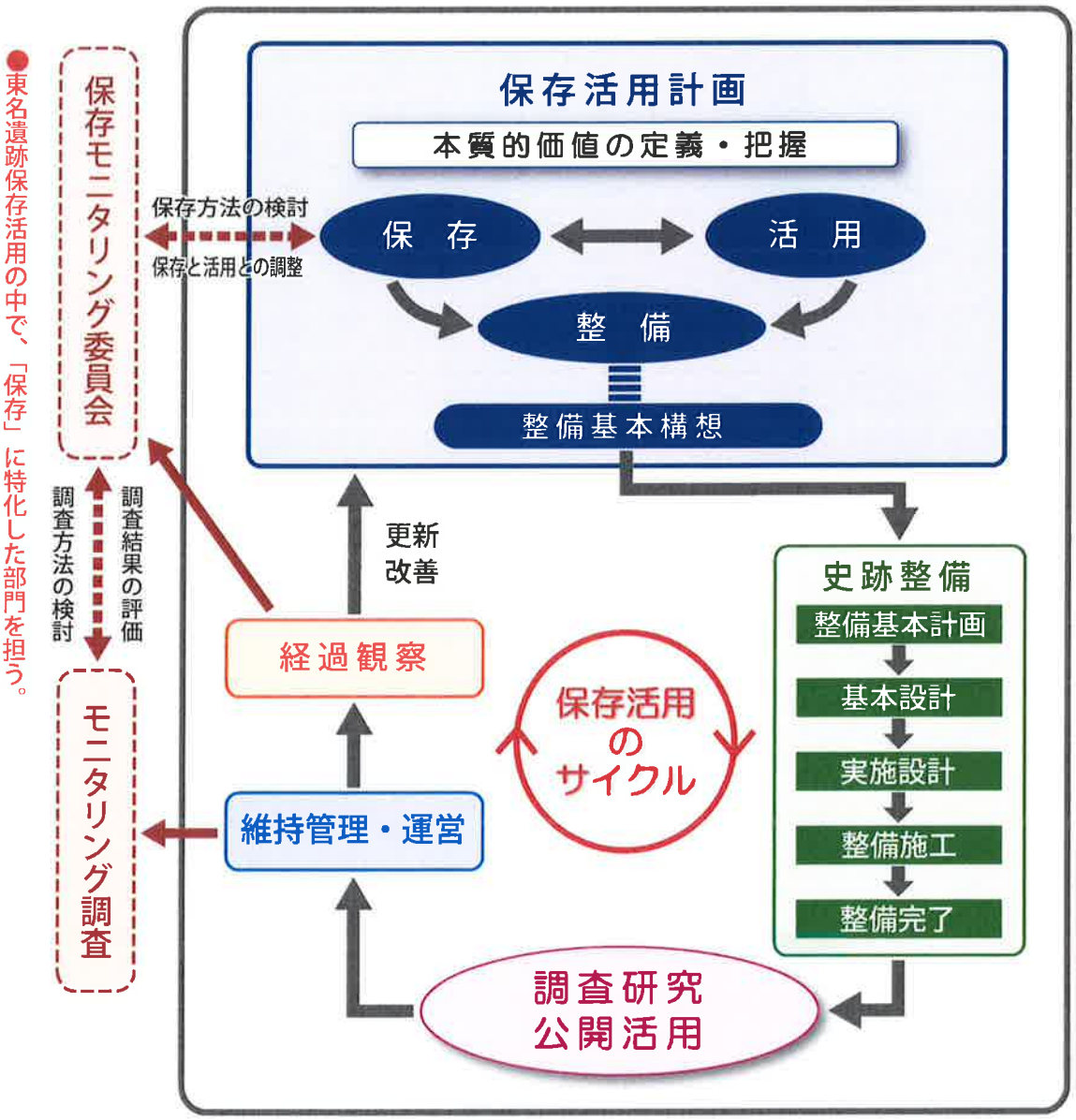
【保存盛土の維持】

前述のとおり、保存盛土の一部に流失が見られ補強工事を行っているが、新たな箇所が流失する恐れもあるため、景観の問題も含め、事前に補強工事を行うか（整備工事と同時）、発生時に行うか検討する必要がある。

表Ⅱ-2　モニタリング観測項目一覧（H30.1現在）

観測位置		地層（計器設置深度）	モニタリング項目								備考	測定方法
			酸化還元電位	土壌水分	地中温度	水位	水温	pH	溶存酸素	導電率		
第4貝塚	No.4-SA	蓮池層（GL-0.20m）	故障	○	○	－	－	－	－	－	【土壌】キャッピング範囲内	自動観測
		蓮池層（GL-1.00m）	故障	○	○	－	－	－	－	－		
		覆土層下端			故障	－	－	－	－	－		
	No.4-SB	蓮池層（GL-0.20m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－	【土壌】キャッピング範囲外	
		蓮池層（GL-1.00m）	故障	○	○	－	－	－	－	－		
第5貝塚	No.5-SA	蓮池層（GL-0.10m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－	【土壌】キャッピング範囲内	
		蓮池層（GL-0.25m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－		
		蓮池層（GL-0.50m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－		
		蓮池層（GL-1.00m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－		
		蓮池層（GL-2.00m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－		
		覆土層（表層-0.50m）			故障	－	－	－	－	－		
		覆土層（表層-0.75m）			故障	－	－	－	－	－		
		覆土層（表層-1.00m）			○	－	－	－	－	－		
	No.5-SC	蓮池層（GL-0.10m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－	【土壌】キャッピング範囲内	
		蓮池層（GL-0.25m）	○	○	○	－	－	－	－	－		
		蓮池層（GL-0.50m）	○	○	故障	－	－	－	－	－		
		蓮池層（GL-1.00m）	○	○	故障	－	－	－	－	－		
		蓮池層（GL-2.00m）	○	○	故障	－	－	－	－	－		
	No.5-SB	蓮池層（GL-0.20m）	故障	○	故障	－	－	－	－	－	【土壌】キャッピング範囲外	
		蓮池層（GL-1.00m）	○	○	○	－	－	－	－	－		
第4貝塚	No.4-WA-1	蓮池層砂	○	－	－	○	○	○	○	○	【地下水】キャッピング範囲内	手ばかり観測
	No.4-WA-2	貝塚内（粘土）	○	－	－	○	○	○	○	○		
	No.4-WA-3	三田川層砂	○	－	－	○	○	○	○	○		
	No.4-WB-1	蓮池層砂	○	－	－	○	○	○	○	○	【地下水】キャッピング範囲外	
	No.4-WB-2	三田川層砂	○	－	－	○	○	○	○	○		
第5貝塚	No.5-WA-1	蓮池層砂	○	－	－	○	○	○	○	○	【地下水】キャッピング範囲内	
	No.5-WA-2	貝塚内（粘土）	○	－	－	○	○	○	○	○		
	No.5-WA-3	三田川層砂	○	－	－	○	○	○	○	○		
	No.5-WB-1	蓮池層砂	○	－	－	○	○	○	○	○	【地下水】キャッピング範囲外	
	No.5-WB-2	三田川層砂	○	－	－	○	○	○	○	○		

東名遺跡保存モニタリング委員会の位置付け



【東名遺跡保存活用の考え方】

東名遺跡保存モニタリング委員会の方向性

【委員会の方向性】

●モニタリング調査は、遺跡の保存環境を保証する唯一の手段であるため、継続的に実施する。
→調査結果の評価、調査方法の検討。

●保存環境に問題が生じた場合の準備や解決方法の検討を行い、活用との調整を図る。
→保存と活用との調整、保存方法の検討。

【当面の検討課題】

●整備基本計画の策定にあたり、保存管理に関する課題を検討する必要がある。

●当面の間、年１回（２月頃）の開催を予定。

【今後の整備計画】

H29.4 ～ H30.8　東名遺跡保存活用計画策定
（東名遺跡保存活用計画策定委員会）

↓

H30.9 ～ H31.8　東名遺跡整備基本計画策定
（東名遺跡整備基本計画策定委員会）

↓

H31.9 以降　基本設計
実施設計
整備施工
整備完了